

ハロルド・ピンター『こびとたち 小説』(2)¹

細川 眞

6

何をしようとも、そのネコだけは起こさないでくれよ。

頼みたいことがある。

わかっていないな。今日ぼくはそのネコにバッハを弾いていたんだ。ぼくは無伴奏のヴァイオリンのためのソナタをやっていた。わからないか？ やつはやつなりに休息に値するよ。これだけは言えるが、ぼくはやつの視点を理解しようとしているわけではないよ。もっともぼくは、きみが考えている以上にそのネコに近いが。ぼくたちには共通のものが多くあるんだ。

おやおや、とピートは言った。

レンはドアにキーを差して回した。彼らは居間に降りていった。ネコは肘掛け椅子に横たわって、頭を上げた。

起きているよ。

やつはもう二度と寝ることはないぜ、とピートは腰を下ろして言った。バッハはおまえの成功のもとかもしれないが、そのネコには破滅のもとだよ。

ぼくにはわからないよ、レンは言った。

彼は椅子からネコをそっと突いた。それはドスンと落ち、尻尾を振り回してピートをにらんだ。

おまえはやつの視点がわからないかもしれないが、おれはやつがおれの見方をよく理解していると思うぜ。

やつに関して、の意味か？

そうだ。

それは何？

侮蔑だ、とピートは言った、そして無視。わずかな関心、軽蔑、そして強力な送り手に適さないことはないかもしれない何でも、おれがやつをそれで高く評価するそれだ。

それは悲しいね。やれやれ。

いいか。どんな分別があるやつだって、数学や音楽が好きで、そしてこうした理由から自身をねぐらの王と公言しているネコには用心深いだろう。

きみは「用心深い」あるいは「疑い深い」と言ったか？

おれは「用心深い」と言ったさ。

きみは「疑い深い」と言った、と思ったよ。

ネコはカーペットに降りて座った、そして足をなめた。

ネコは今までの動物であることを止めたぜ、とピートは言った。やつを見るよ、やつは十六音符になったぜ。

きみはすべてのことをバツハのせいにできないよ。

どうしてできない？ やつがこの家を厳しく管理しているんだぜ。

レンは頭を振ってカーテンを引いた。頭を振りながら、彼はテーブルに座り、歯を食いしばって息を吸った。彼はメガネを下げ、枠越しに部屋の方々をじっと見上げ、やがてメガネをぐっと上げて元に戻した。

何？ 彼は叫んだ、鼻からメガネをさっと外して。それはどういうこと？ きみは何て言った？ え？ バツハ？ バツハ？ バツハがどうしたの？

ピートは肘掛け椅子に仰向けにもたれていた。

教えてくれよ、と彼は言った、バツハって誰だ？

彼が誰だと？ きみはぼくにそのような質問はできないだろう？

彼についておまえはおれに何が言えるのか？

きみは狂っているよ。

いいか、前に体を傾けながらピートは言った、少しは常識を持てよ。この議論にもかかわらず、おまえは彼について何かを知っているに違いないが。彼は何の責任があった？

いや、とレンは言った。他の誰かに尋ねてみて。ぼくは言えないよ。それは問題外だよ。話せないよ。

できない？

レンは肩をすくめて戸棚の戸を開けた。棚からワインを一本とりコルクを抜き、そして香りを嗅いで、二つのグラスと共に瓶をテーブルに置いた。彼は瓶を眺め、それを持ち上げてラベルを読んだ。彼はそれからそれをピートに回した。ピートは香りをかいで、それを戻して渡した。レンはメガネを上に掲げて、再び嗅ぐため息を止めた。彼はワインを注ぎ、鼻までグラスを上げ、中をのぞいてさっと一口すすった。彼は、口にワインを含んで、目をぎよるぎよる動かし、顔をぱちぱちしながら部屋の方々に歩いた。彼はガラガラ音を出し始めた。

バツハ？ 彼はワインをグラスに吐き出して言った、それは簡単だ。バツハについての核心は

バツハについての問題点は

彼は瓶を持ち上げてしかめっ面をし、そしてそれを戸棚に戻して戸を閉めた。

バツハについての問題点は、とレンは言った、ぼくにやらせてくれ

彼はテーブルに座って急いで立ち上がった、グラスを持ち上げ、ズボンの尻のところをぱんとはいた、そこにこぼれたワインがべったり付いていた。

うっ！うっ！うっ！

布切れを使え。

うっ！

回ってみろよ、ピートは言った。何ともないぜ。

染みて濡れたよ。

おまえはバッハについて話をしていたぜ。

レンはズボンを緩めて、脱いだ。彼は足でそれをつかみ、激しく振った。彼はシミを調べて、足を入れズボンをはいた。

39と6、5年前。

次は逆立ちをしたらどうだい？ ピートは言った。後生だから、それ、くそバッハと上手く折り合ったらどうだ？

バッハ？ それは簡単だ。バッハについての唯一の核心は、彼は自分の音楽を自分を通して、彼からでなく、発散するものとして見ていた、ということだよ。バッハを通してAからCへ。他に言うべきことは何もないよ。

彼は肘掛け椅子に座って、仰向けに反り返った。

ベートーベンを見てよ。

どういう意味だ？

どういう意味だって？とレンは言った。ベートーベンは常にベートーベンだ。バッハは冷たさ、あるいは熱さ、あるいは水、あるいは炎のようだ。彼はバッハだがバッハではない。何らたとえるものはない。

ちょっと待ってくれ

いいかい、とレンは尻の下の布に触って言った、ぼくがバッハの音楽を聞くとき、ぼくは認知とは何かを知るんだ。ぼくがバッハを聞いているという認識ではなくただの認知だよ。皮膚はない、木はない、肉体はない、骨はない、オルガスムはない、回復はない。生命はないが死はない。行為はない。意識は四つのあるいは四つのごたごたに委ねられる、勿論それはきみが誰かによるが。

そうか？

こう言うのに問題はない さてここなんだ。それは当てはまらないんだ。もしバッハが他の誰かなら、それは当てはまるだろうが。そのときみは言えるんだ はい、わたしはこれを聞いています わたしは、と。しかしバッハはきみを知りたくない。それは、無意味な態度だ。無意味な。

ふん。

バッハは弱者のための作曲家だ。しかし、彼は弱くも強くもない多くの人にとっては恐ろしいという点で、又強者のためのでもある。

わおっ！

バッハは、とレンは立ち上がって壁まで歩いて行って言った、殺人、自然、虐殺、自身、疫病、反逆、基金や他のものに関心はない。彼は正確な意味では、大事には関心がない。彼にはいつも余裕がある。きみは、信じることができようができませんが、

彼を手の内に押さえられる。彼を完全に支配できるよ。しかし、もしきみが彼を手の内に押さえるとしても、きみは完全に彼を支配していない、きみはそれを理解しなければいけないよ。

ふーん。

世間の人々は言うよ、ピート、とレンはテーブルに腰をかけて言った、温かく寛容な女性は他の人すべてを微々たるものにするよ。このことは全く疑う余地はない。シェイクスピアでさえ二、三の精選された言葉になる。しかしバツハは決して、ぼくには、二、三の精選された音符にならない。それはぼくが誰をも信用しないが故だ、と思う。ぼくは思うに、どこでぼくの財産が女性のそれにもなり、そしてすべてが健忘症となるかを理解できるよ。しかしすべての中で最後のカードは、今のところ、彼のだ。

なるほど。

一つの、いい、とレンは立って言った、バツハについての純粋に技術的な要点は、彼の主張と、その主張の彼による成熟した正当化なんだ。ブ ブ ブ ブ ブ ブ ブ ブ ブ ブ ブ ブ ブ ブ ブ ブ ブ ブ、、、 プ ティレレレララララララ ブ ブ ブなど。きみはティレレラに加わることはできるが、先の多くのブブには容易にはまるよ。おあいご用だ。それだけだよ、バツハについてぼくが言わなければならないのは。それごらん、きみはぼくに尋ねる必要はなかったんだよ。ええと、ピートは言った、ああ、そうだ、おまえの言うことには一理あるな。

彼らはポケットに手を突っ込んで、カーペットの上に立った。

一杯ココアはどうだ？

ココア？

そうだ、ピートは言った、乾杯しよう。

いいよ、いいよ、そうしても構わないよ。

彼らは部屋を離れてそして流し場まで降りていった、ネコが付いてきた。地階の窓を通して、月がつる下げた陶器に歪んで輝いた。レンは明かりをつけてヤカンをかけた。彼はココアの缶を持ってきた。

そうだ、おまえの言うことに一理あるぜ。

あり得ないよ。

おれの顔はしゃれこうべのそれだ、流しの上の薄くはがれ落ちた鏡をのぞき込んで、ピートは言った。

きわめて健康だよ。

知ってるかい、隣のやつが先日おれを止めて、彼女が今まで見た中でおれが一番ハンサムだと言ったぜ。

きみはそれに対して何て言ったんだい？

何が言えるってんだ？

ベーグルが二、三個あるよ、とレンは言った。

ピートはテーブルに座ってその表面をなでた。

これは非常に固いテーブルだな。

ベーグルが幾つかあると言ったよ。

いいや、結構だ。いつからこのテーブルはあるんだ？

それは家の先祖伝来の家具だよ。

そう、ピートは振り返って言った、おれは上等なテーブルが好きなんだ、そして上等な椅子。頑丈なもの。所有者におあつらえ向きの。船にそいつを置きたい。川で走らせる。ナロウボート。船室に座ってそして外の水を見る。

誰が舵を取るんだい？

係留できるぜ。係留する。人ひとりっ子いないところで。

どこへ行くの？

行く？ ピートは言った。おまえは行かないだろう。

さあココアだよ。

彼らはすすった。

マークはどうしてる？

元気だよ、レンは肩をすぼめた。

やつは自分のために何を言おうとしてる？

昨晚唾を吐かないと言ったよ。

それを聞いて嬉しいぜ。

そう言えて嬉しいよ。

やつは何にたいして唾を吐かなければならないんだ？

そうだね、彼は時々たっぷり吐きたいんだ。

その通りだとして、今回はどんなことで唾を吐くのか、あるいは吐かないのか？

ピートは尋ねた。

ぼくの検査官。

誰だ？

キリスト。ジーザス・クライスト。

なに、ピートは起き上がって言った。やつはジーザス・クライストに唾を吐きかけることを考えているのか？

全くその通りというわけでもないよ。しかし彼は時々そうせざるをえないんだと思う。

何のことをペチャクチャ喋っているんだ？

ええっと、レンは言った、きみは彼にぼくが新約聖書を見ていると言っただろ。

ああ、それでやつはそれに唾を吐きかけているのか、え？

彼はそうしないと、ときみに言っただろ。

それは非常にところが広いことだな。

ところで、彼はできるかもしれない。だれにもわからないが。

ピートはポケットに手を突っ込んで、笑った。

おまえはジョー・ドウクスのように語っているな。ジーザス・クライストに唾を吐くことができる？ おれはすぐに最大限の努力をするぜ。しかし続けてくれ、面白い。教えてくれ、何故やつが唾を吐くことができるとおまえは思うのか？

きみは一つ一つぼくの指の爪をはがしているよ。

おれはそっとおまえを許しているんだぜ、さあ続けて。

わかった。彼には一つ答えがあるように思う、それだけだ。たとえ彼が持っていないにせよ、彼は持っていると思うと思うよ、そしてたとえ彼は持っていると思わないとしても、彼は持っているかもしれない、あるいは、もしよければ、彼の名前を持った誰かが持っているかもしれない。

やつの名前の誰かが持っているかもしれないだって！ おまえはネコにテーブルの下を這わせたな。このようにしておまえは毎晩ネコに話しかけるのか？

わかったよ、とレンが言った、きみは何か言うことがあるね。何故それを言わないんだい？

ないぜ、とピートが言った。

彼はコップを取り上げて、ゴクリと飲んだ。

ない、彼は微笑んだ。おれは言うことは何もないぜ。

本当？ レンはしかめっ面をした。

彼は見上げて、頭を振った。そしてそれから熟考して、くすくす笑い始めた。

いいよ、彼はもっとも、きっときみが評価するような何か他のことを言ったんだ。

それは何？

彼はディーン・スウィフトについて語っていた、ね、そして彼はついには自分自身のくそを食らうに至った、そして金を精神病院に任せた、と言ったよ。おまえは最近ピートに会ったか？ 丁度このようにね。あれこれ考えずに。きみはそれをどう思う？

ピートは前屈みに座って笑った。

それは非常に面白い。

面白い！ そう言ってもいいよ。

そうだ、非常に奇妙だ。

奇妙？ どういう意味、奇妙とは？

おれが先日仕事から帰宅したとき、とピートは言った、隣の人がドアの所にいたんだ。煙が窓から出ていたのだ。

何だって？

大丈夫だった。それはおれがオープンに忘れていた焼きパンだった。部屋は大丈夫だったが、パンはネコには丁度いい加減にできていたぜ。もっとも隣人は興奮していて顔が真っ青だった。明らかにおれは人間の骨を煮ていたんだが。

うん、ぼくにはわかるよ、レンは頷いた。

わかる？

ああその通り、ぼくにはそれが大丈夫わかるよ。

栓が滴った。レンはきつくそれを回した。

ところで、調子はどうだ、レン？ ピートは言った。

何が？

景気はどうだ？

フン、とレンは言って椅子を蹴った。ぼくはカラスのための晩飯だよ。

誰がだ？

いいかい、とレンは言った、そして椅子に股を広げて座った。ぼくは部外者だよ。

家に帰れよ。おまえは？ チャーリー・ハントのようなやつだな。

それでもある。

おまえの問題は何か言ってやろうか、とピートは言った。おまえにはもっと融通性が必要だぞ。

融通性？ 融通性。きみは全く正しいよ。融通性。いったい何の話しだい？

おまえはキリストとどのようによくやっているんだ？

キリスト？ 違う、違う、違う。彼は本来の彼。ぼくは本来のぼくではない。ぼくたちはどう関係しているかわからないよ。

あきらめることは、とピートはタバコに火を付けながら言った、失敗というよりもむしろ戦術上の誤りだ。融通性ということでおれが意味するのは、自身の脱線に驚かないということだ。おまえは目下のところ次にどこに出ようとしているのかがわかっていない。おまえは悪臭を放つ古いシャツのようなものだ。もっと抜け目なくしろよ。もしこのように続けているなら、あまり年をとらないうちに自分の考えに閉じ込められてしまうぞ。おまえはこの恐怖を取り除いて、戯れを哀れみたいんだ。それはナンセンスだ。常識が不思議なことをもたらすのだ。おまえがしなければいけない最初のことは、そのネコを殺すことだぜ。それはおまえをどこにもない所へ導いていくぞ。

レンは立ち上がって、そしてメガネを拭いた。彼は下を見て体を震わした。

いいや、と彼は言った。ぼくが見るたびにちがった空があるよ。雲はぼくの目の中を走り行く。ぼくはそんなことができないよ。

体験の理解は、とピートが言った、あきらかに、それが価値があると考えられるかどうかの識別力次第であるに違いない。それがおまえに欠けている点だ。おまえは、二つのことを単純に区別する能力を持ち合わせていない。おまえはドアから歩いて出ていくとき、毎回崖を超えてでも真っ直ぐに行く。おまえがしなければいけないことは、評価の力を養うことなのに。もしおまえが一日中足元ばかり見て真っ直ぐに歩き回るとしたなら、おまえにはどのように何かを査定し確認することを望めるのだ？

いいかい、レンは言った、ぼくならバツ八を決して断念できないよ。

誰がおまえにそうするよう求めたんだ？

してない？ ああ、ああ、わかった。ぼくはきみを誤解していたよ。

何を？

きみはぼくにパッハをあきらめるよう求めなかったんだね？

おまえは何のことを話しているんだ？

それは他の誰かだったに違いないな。

レンはコップをきれいにし、流しに置いた。

マークは何をやりようとしているんだろう。

誰か女に甘い言葉をささやいているんだ、ピートは微笑した。そう思わないか？

多分。

そうにちがいないぜ、とピートは言った、やつは変わった男だ、マークは。おれは時々やつは雑草のような男だと思うぜ。

体の下で椅子のバランスをとりながら、彼は足をテーブルの上に置いた。

そうなのだ、と彼は言った、おれは時々やつは雑草のような男だと思うぜ。しかしそれでもわからないな。やつおれを驚かす、あのやつ時たま、つまりその善いことで。しかし、しばしばやつについては驚くぜ。おれは時々、やつは靴の泥をも利用すると思うぜ、やつはただゲームをしているだけなんだ。しかし何のゲームだ？

レンは蛇口を回し、受け皿をすすいだ。

時たま思うぜ、とピートは言った、なぜおれは気にするのかと。やつは、結局、兵力を隠しておく十分な奇想を持っている。そして、それを後押しするのに何かがあるか？ そこに核心があるんだ、そうだろう？

レンはコップをそそいで、答えなかった。

自信のある態度。しかしそれには実体があるのか、あるいは不毛なのか？ 時々おれはそれは不毛だと思うぜ。爆心地と同じ不毛。しかし独断的にはならないが。

そうだ、レンは言った、コップを拭きながら。

やつはとらえどころのないやつだ。もちろん、やつが好きだぜ、そのことになれば。おまえは多く許せるだろ。しかしやつは今まで一度も昼間の仕事をやったことがない、それがやつの厄介さだ。ちょっとしたヒモなんだ、やつはそれを否定しないだろう。好色の度を越しているとおれは思うぜ。しかしここだけの話だが、やつは足元に用心しないと、すぐさま尾羽打ち枯らす身となるぜ。

シー！シー！とレンは言った。

ネコがテーブルの下から抜け出した。レンはそれをかわして小皿にミルクを注いで、立ち上がった。ネコはぴちゃぴちゃ飲んだ。

そのネコを何て呼んでる？

ソロモンだよ、レンが言った。

彼は食器棚にもたれかかり、メガネの下の目の角を突ついた。

さあ、とピートは言った、もしよけりやおまえを元気づけるために昨夜見た夢を話

そうか。

いいよ。

昨夜は夢をみるとは予想しなかったんだが。

それはどんなのだったの？

非常にわかりやすいものだった、とピートは言った。おれは地下鉄駅でヴァージニアと一緒にプラットホームにいたんだ。人々は走り回っていた。ある種のパニックが起こったんだ。周りを見回すと、みんな顔の皮がむけているのが見えた、ぶつぶつだらけで、水ぶくれになって。人々は悲鳴をあげて地下道に突然大勢で現れた。火災報知器が鳴っていた。おれがギニーを見たとき、彼女の顔も次々とはげていくのが見えた。石膏のように。黒いかさぶたと斑点。皮膚は猫用の肉の塊のように一つずつ落ちていった。それが電気を帯びたレールでジュージュウいってるのが聞こえた。おれはそこから彼女を連れ出すため彼女の腕を引っ張った。彼女は動こうとしなかった。彼女はそこに佇んだままだ、顔の半分でおれをじっと見て。おれは来るように彼女に叫んだ、しかし彼女はなお動こうとしなかった。その時おれは突然思った—畜生、おれの顔はどうなっているんだろ？彼女がじっと見ているのはその顔か？おれのも朽ちていっているのか？

レンは喘いだ。

要注意人物録用の顔か、そうだろう？ピートは言った。

レンは手で目を覆った。

そのことは気にしないでいいぜ、とピートは言った。これを見ても。おれがどれくらいできるか見ろ。

何を？

数えるんだぜ。

ピートは床に腹ばいになって、前腕で腕立て伏せをし始めた。

いくつだ？ピートはうなるように言った。

十五回。

ピートは彼の前の方ををじっと見て続けた。

二十回

あー。

二十五回。

あー。

二十九回。

十分だ。

彼は力を抜き、にやっと笑い床に座った。

悪くはないだろ、えっ？

きみは何でできてるの？とレンは言った。ぼくの力では無理だよ。

もう一週間あったら三十五回はやれるぜ。

7

小人たちは仕事に戻る、とレンは言った。彼らは一連のなりゆきを見守っている。彼らはいったん事を嗅ぎつけると、非常に早くから仕事を始める。彼らは都会ふうを装うペテン師のようだ。彼らは都会でだけ働く。しかしながら、彼らは明らかに熟練した労働者だ、そして彼らの商売は危険がないわけではない。彼らはノロシの合図を待って、彼らの道具一式を取り出す。彼らは何ら時間の無駄なく現場に着く、そして危険区域に輪を描く。そこで彼らは部署につき、もし必要ならば即座に変えることができる。しかし彼らはどっちみち、取りかかった仕事が終わるまで仕事を止めない。

ぼくは申し込み金を払うことができなかったが、彼らは、短期間の条件でぼくを彼らの仲間に入れることに同意してくれた。ぼくが彼らと一緒にいるのは長いはずはない。この特殊な任務が冬まで続くとは思えない。このゲームはその時までには終わるのだろう。しかしながら現在、ぼく自身がことのなりゆきを見守ることができる唯一の方法はこれだけだ。そしてぼくが、為替レートと相場の上がり下がり周到に注意を払うことが重要なのだ。おそらくピートもマークも自分の為替の状態がぼくの相場に及ぼす結果に気づいていない。しかしそうなのだ。

それでぼくはこびとたちについて行き、彼らと共に見張るのだ。彼らはほとんど失敗はしない。彼らの十分な警告を得られるので、もし万が一地滑りの恐慌があろうとも、ぼくはぼくの株を精算することができるのだ。

8

ピートの要望で彼女は腰を下ろした。彼には言うておくことがあった、彼は説明したが、それは有益となりそうだったので彼女はそれを聞いておくのが賢明だっただろう。初めに暖炉の前に立って、彼は、肉体的外見と、それがどんな程度に実際的な価値をもつか、との問題を考えるよう彼女を促した。彼自身の関心は、どこで肉体は好ましい力であるのをやめ厄介なものとなるかについてだった。例えば、彼自身とマークがいた。人々の肉体的外見が先んじて、そして彼らの人格が加わろうとする前に接触するんだと、彼は敢えて言おうとした。分別のない人には、それは後に来るものへの指針として役立つかもしれない、しかしその指針はどれくらい正確だったか？ 彼自身はいきな男だった、マークは丁度ベッドから出てきたか、あるいはもぐり込んでいくかのように見えたやつだった。彼らの外見の両方とも事の真相と矛盾している、と彼は思った。実際、それは数少ない彼ら相互の問題の一つだった。彼らは、肉体の自分の形態とある種の実際役立つ妥協を共にしなければならなかった。そして二人がこの問題を解決するのに取る道は、解決を与えるようなものとなりえるだろう。マークはというと自分の肉体の習性に従うのに全く満足しているように、彼には思えた。彼はこれらの理由だけに基づく崇拜を受け入れるのに満足していた。しかし、彼には間違いなく性的達人としての彼の側面と能力よりも提供できるものがもっとあった。彼は自分の潜在性を漏れさせていたのだ。彼は、自分の肉体の気まぐれとのそのような独りよがりの繋がりで行動して、自分自身や

他人との関係において、何らかの客観的あるいは批判的視点を維持したいと思えなかった。というのも、嗅ぎつけたことと突き止めたことあるいは出来事を量る人の能力の間には、距離が常に保たなければならない。マークはこれに失敗しているだけでなく、あらゆる修正には閉じた本だった。彼は批判を受け入れなかった。

彼女はじっと聞いていた。

レンは、もちろん、肉体的タイプというより肉体的しるしだった。彼の振る舞い、彼の表現態度は、中舌音でやむにやまれぬ口ごもりの何かによって特徴付けられていた。彼は決してじっとしていなかったが、そうであったときには、その静止は身振りであり又主張でもあった。しかし、それは前面にあった彼の特徴そのものでは決してなかった、それはその後から来たものだった—煙幕、彼の本性の遭難信号。彼はその領域でのみ出くわされ、そして彼の肉体的体質への論評には無関係だった。というのも、彼の肉体はそれ自体、実際関与しなかった。彼と一緒にいる時、人は不断の活動に気づく、それは彼の肉体の神経の末端とその境界で、そしてそれに付着するもの—彼の手と彼のメガネに対してのみ得られるだけだった。彼の眼は神経末端としてのみ活動的だったが、それらは容貌としては見なされ得なかった。そしてこの神経領域が通常は総体の一部となっているところでは、レンの場合それは総体だった。それは彼の肉体に先んじたが、それは、彼がそうである見せかけと謎の箱の単なる運搬物にしかすぎないということになっていた。

彼女は後ろにもたれた。

実際のところ、レンが嗅ぎ取ったことと彼がそれについて思ったこととの間の距離を保てなかったのは、マークと同様であった、しかし異なった理由でだが。彼らは双方とも何らかの特定の臭いとその結果として生じる結論の間を区別できなかった、が、マークが単にあまりに怠惰すぎて区別を試みることができなかったところで、レンは自身の識別力への信頼に欠けすぎたのであった。彼は臭いに固執して、思考が臭いとなるまで、それを思考と同一視するにちがいない、なぜならば彼は思考の真の性質とその要求物に敢然と立ち向かうことができなかったからだ。しかし、マークは訂正を受け入れない一方、もっとも彼はやがて彼の過ちを発見する、あるいは例によって理解するよう導かれるかもしれないのだが、レンは指示も手助けも受け入れた。

彼女は後ろにもたれて、聞いていた。

これを、と彼は続けた、自分は喜んで与えようとした、そしてどちらにももっと多くをだ。というのも、考えてみると、あらゆる相違を考慮すれば、彼には彼らの友情は貴重だとわかっていた。もっと言うならば彼には、彼らが一種の教会を構成していると言うことができるかどうかははっきりしない。彼らは教義や方向でほとんど一体ではなかったが、しかし、共通の地盤と枠組みはあった。最高の状態でなら彼らは一団を組織した、そして彼の言葉では、教会のようなものと呼ばれる資格がある一団 公共の善のための彼ら三人の同盟、そしてその同盟への信仰。それは勿論、均整のとれた柔軟性のある組織に向かって取りかかることでもある。この組織が完成近くのどこにもない、というこ

とに彼はよく気づいていた。彼らの相違には一団内の墮落へ導いていく力があつた。それらを封じ込めるのに骨折りが必要とされた、しかしもしそれらが、封じ込められたなら、あるいはもっと生産的なことに心からの融和へともたらされるなら、そのときこそ彼らは成就を語る事ができるのだらうが。彼にとってはその努力は価値があつた。それは価値がある以上だつた、それは全く腹藏なく言えば、必須のものだつた。それは単純なコミュニケーションの問題であつた。もし彼が仲間と理解し合えないままならば、頽廢以外なにも残らなかつたのだ。

彼女はじっと聞いていた。

一団内の墮落の可能性を認めたなら、彼はその外側から墮落問題を扱つたらう。外部の影響は害なしで吸収されるだらうと、彼は確信した。例えば、ヴァージニアはその時彼らの内の一人 彼自身 に影響を与えていた。彼女が彼に明らかな善をなしたという仮定なら、彼自身はその教会に提供するものはもっとあるだらう。他方、もし彼女が彼に明らかな害をなしていたなら、他のもの達は、理解に見せかけて彼への義務を果たすだらう、と彼は思った。勿論、彼らの間に不一致を引き起こし、その組織を腐敗させるために、一方でレンに、他方でマークに作用するそうして外部の影響に賛成する主張がなされえた。しかし、その場合は、それは単に選択の問題だつたらう。彼らはどちらがより価値があるかを考えなければならぬだらう 彼らの喧嘩の問題か、それとも同盟のそれか。そのような場合には、教会が益をなすか、あるいは彼らは全て荷造りして家に帰るか、であつた。

たそがれ時になってきて、彼女は椅子の中で体を楽にした、部屋の影が交わつていた、今までに、言葉がふたたび、彼女の周りに、彼がタバコを吸つてしゃがんでいるベッドから次々と。

空虚さとべちゃくちゃ、彼はそれらで一杯に満たされていた。彼の生き方が危機を強いていた。例えば、イギリス国教会で彼が過ごした時間は浪費と幻想だつた。それは、知的な皿洗い以外のなんでもなかつたが、そこでは彼は建設的な空想家として下準備をしていると妄想していた。それはただ彼の力の弱体化として役立つだけにすぎなかつた。彼に秘められたものは、絶えず潜在的のままであることの不満だけからすり減つていき、沈滞するようになった。包み隠しはないだらうが、自身の力量を超えて彼にはほとんど何もなかつた。行動すべき時だつた。しかしながら、もちろん、彼にはついていくべき道はあつた。それについては疑う余地はない。彼は病をおして働き、そしてそのようにそれを治癒しなければならぬ。彼の状態は、彼が融和させられるまで、それに従ふことによつてのみ破壊されえた。しかしイギリス国教会の一部のままに居ることには最早自分にはない一種の忍耐を必要とした。彼らはばかばかしいことにあまりにも浸りすぎていた。例えば、神の性質についての彼らの観念は見当違ひだつた。彼らが實際行なっていることは、一人で悦に入っているだけだつた。神に関しては、彼らは彼に帽子を与えながらそして彼に待てと言つた。彼らは彼を彼らの創造物 生産品 と見なした。彼らは会社を管理して、そして彼がしなければならなかつたことは、使い走りをする

ことだけだった。神が単調でつらい仕事をした一方彼らはその利益を刈り取った。彼が参加した最後の会合で彼は宣言した—おまえたちのこの神はどこにいるのだ？ このテーブルに彼を置け、そして彼を見よう。すべてが一目見よう。爆弾が破裂したと彼らは思った。実際、彼らは、もし天の門が彼らに開いたなら、彼らを感じるものはすきま風だけだろうという種の連中だった。

夕暮れの中、彼女は静かに座っていた。今ピートは彼女に近づいた。

同じことは詩人達にもあてはまった。彼らは犯罪的離脱の罪があった。彼は彼女に書くという行為は自分自身に関わることだということを印象付けなければならない。従ってそれはモラルの問題だった。自分についての詩人たちは、自分の名前を署名するたびに自身の死刑執行令状に署名をしていたのだ。彼らの作品は自己表現というよりも自己創造だった。そして刊行されるものは嘘ばかりだった。彼らが書くそれぞれの詩は、死後生じた屁以外の何物でも無かった。死体を産むことだけできる死人が自分自身の形で分娩する。それは、書く目的の墮落であり裏切りであった、自身の臭いに喜んでいるという点でのみ活動的だった。芸術作品が真空の中で想像され成し遂げられることは、致命的だった。それは、一品の料理と同じ風に目的がなければならない。もし人が食べるつもりでないならば何のためにプラムプディングを作ったのか？ というのも、書くことは、自己献身である他に、教え啓発しそして多分変容させなければならなかった。人間は判断の過ちであるかもしれない、が今までのところでは人間は目的をもった要因のままだった。そしてこれらの人々は、自分たちが人間が直面した内的蠟細工を絶えず思い出させるものだという点でのみ、実際的な価値をもっていた。彼らは彼らを書いたどの言葉でも罪をおかした。

暗くなっていた。ヴァージニアは立ち上がってガス台にヤカンをかけた。その後、二人はリー川を渡って散歩に行った。

9

ピートは歩き回ってスレッドニードル通りに入って行き、灰色の傾いている石を回避して、立ち止まった。彼は見上げた。

バルパライソ銀行。バルパライソ銀行に違いない。レンガのない建物。幾何学的、レンガなし。信念の行為。真っ直ぐ。頂上と裏まで。太陽との幾何学的会話。十字架の上の傾斜。太陽の角度が傾いて、交渉へ。速記で書き留められる。虚偽的反射に騙されるな。肺炎の不適切。市場の供給過剰。迂言的活用よりも悪い。しかし太陽すべての形すべての大きさ。いたずらをする。屋根での玉虫色のもの言い。身振り言語。それは何だ？ 正二面体？ あるいは誰が多角形に唾を吐いた？ おれに数学的ボールを投げろ。おれはそれを信じたい。

彼は壁によりかかった。

タバコに火を付け、正常そうな顔をしろ。

太陽は、レンガのないバルパライソ銀行の下へとねじれ、突進し、旗竿に突き刺さっ

た。ピートはタバコを吸いながら、往来の雑踏、真昼の車両のきしみとひとしきりの動きを見た。眩しい光の中へ沈んでいく人々の姿、通り過ぎ、歩いて行く。眩しい通りの中のオベリスクの震え。素早い黒い腕が突き出され、曲がって過ぎていった。

ほら。そう。亜麻仁と封蠟。首輪をつけた子犬。軽い体重。その足の付け根のふくらみの弾力性。国家の支配者。内幕物。フリーメイソンと平和の創造主。即座の信頼できる情報。ではまたな。最善のものだけ。合い言葉と粋なジン。おまえの名と番号は何だ？ なくすなよ。

寄りかかって、彼は歩いている通りを見渡した。はめ込み式の建物が後方でその傾斜から均衡を保っていた。それらは太陽と太陽の間でぐらついていた。

午睡の時間近く。屋上庭園でばったり横たわり。レモンティーと日よけ。古いリンゴの木の陰で。隙間風の及ばないところで。地球儀を回転させて、歯をほじくれ。

何百もの窓そしてそのどれにも人の顔がない。昼は存在しない。地下の仕事。仕事を続けていく。そこには昼がまったくない八時間労働。仕事をする世界。おれが仕事をし侵害するところ。だれの指図で？ 誰かが話した、一言も信じるなどと言って。ピートはぐるっと回って、見上げた。バルパライソ銀行の窓が特徴のない輝きを点滅させた。

親指から耳の穴まできらきら反射している。すべて無名によってなされている。道具を持っているかどうかにかかっている。すべての人にたくさんの仕事。しかし神の恩恵なしでは許可は無い。それを粹にはめろ。あらゆる天候でもいつもそのゴミを拭け。

建物は揺れる、次、次と、スレッドニードル通りに沿って。

これは何だ？ 堂々と足取りも軽く。彼女はだめと言うだろうか？ この脇腹を見て。おまんちょ。私と寝てそして一つ買って。おまんちょ。彼女は木馬に跨がるだろう。ダールストーンまでずっと。間違いない。以前に行ったことがある。女の入り口のそばで見捨てられ。私の精液なしで、干からびたニシンのように。

ピーター・コックス！ おお！

神の審判。

おや、おや、おや！

デリク！ ピートはあいさつして、手を握った。まあ、まあ。

はは、ピートは微笑んだ。おまえはこのあたりで何をしているんだ？

ここで働いているよ、デリクは笑った、顔を輝かせながら。

なんだって？ ピートは言った。信じられなかったぜ。おれもそうなんだ。

まさか？ デリクの目が輝き、彼の顔が広がった。そんなこと夢にも思わなかったよ。おや、おや、おや！ どこでだ？

どこで？ ピートは言った。おお、ドビンとレーバーだよ。あの角を曲がった所。

おれはその近所だぜ！ デリクは激しくぶつかってきた、破顔一笑し、肩が強くあ

たった。

へえー！とピートは言った。まあ、まあ、まあ。

きみは非常に元気そうだね、と顔をしわくちゃにしてデリクは元気づけた。少しも変わってないね。髪の毛はまだ巻き毛だ、そうだろう？ 景気はどうだい？ 仕事はいいかい？

おお、ピートは肩をすぼめて横滑りした、仕事は—そのう—悪く—ないぜ—デリクよ。

おやまあ、デリクは顔が閉じて強くたたいた。この前会って以来三年になるね！そしてその前は、学校を出て以来会ってなかったね。

そうだ、とピートは言った、そうみたいだな。

ああ、デリクはいびきのような音をだした、顔は怒ったように。一世紀だ！今何をしているんだ？ 昼食の時間か？

まあ、そうだ、ピートはふくれっ面をした、今は。大体のところ。

なんて幸運なんだ！ デリクは大げさに芝居した、顔はやけどするように熱く。一杯どうだい？

ええと、実のところ、ピートの顔にしわが寄った、人に会うので急いでいるところなんだ。マーク・ギルバートだ。おまえはやつを知っていたね？

ギルバート！ もちろんさ、デリクはモーと鳴いた、彼の顔はきしんで。役者になったんだったね？

そうとも、ピートは言った、しかしいいかい、やつは何か考えていることがあるんだろ、思うに。そのことでおれとじっくり話しをしたがっているんだ。どんなのかわかるだろ、デリク。こうした役者を知ってるだろ、えっ？

女の問題か、そうだろう。デリクは受け流した、彼の顔は薄く剥がれ落ちた。大丈夫きみの言おうとしていることはわかるよ。役者なんて、えっ？

そうだ、ピートは言った。やつらは変わった人間だよ。残念なことだがそうなんだ。しかしおれたちはきっと互いにまたばったり出くわすな。二人ともこのあたりで仕事してるので、多分。

もちろん！ デリクはドシンと動いた、彼の顔は喜び、肘をつかんで。何年かぶりに一杯飲まないかね。

確かに。

それじゃ、いいかピーター。顔は歌うようにデリクは跳びはね、ポンと背中を叩いた。ぼくに電話をしてきてくれないか？ ぼくたちはいつか夜仕事後に会えるよ。ちょっと待って、書くから。ぼくはまだロビンやビルに会ってるからね？ 古い仲間の誰かに会うことあった？ おお、そう、ギルバートね。さあどうぞ。では、いい、ぼくに電話くれるね？ ロビンとビルに電話するから、そしたらぼくたち皆陽気に楽しいおしゃべりができるよ。

ロビンは近頃どうしている？

元気だよ、きみ。まだ結婚はしていないが。きみはもう結婚したの？ デリクは半音上げて言った、顔は芽をふき。

はは、ピートは言った。ああ、それが問題だかな？ 結構。それではおれはそうしよう。もう出かけないと。こいつら役者達を知ってるだろ。

会えて運がよかったよ！ デリクはこっこと鳴いた、顔は死んだように。忘れないでくれよ。

ピートは振り返って手を振った、そして道路を渡っていった。

全身汗をかいている。誰かがそれを仕組んだんだ。油断なく気を配らなければならぬ。おれの反対側を見なかっただろうが。怪しい。おお、そうだ、やつは見ただろう。やつらはすべてする。帽子を被るべきだ。口ひげをはやし。車いすを手にし。付け鼻は驚くほどうまくいくはずだ。あれはぴったり合うやつだった。あの紙製のはどこにある？ あー。水の泡だ。

車のブーブーという音と往来の間で、ピートは道路を横切った。波形が付いた鉄の板の下、彼は熱い中人々によってレンガと壁が配置され建てられているのを見た。彼は横道へと曲がっていった。

ここの下手。川。そうだ。近づけば近づくほどよりさわやかなにおい。もっともまだ遠い雑音。がやがやとばちばち鳴る音。ロンドンに燃えるよう。ああ。サンドイッチの女たち。町の男に脚を見せるレビュー。壁に止まる鳥。捕獲を待っている。猛禽。女であるのはどのようなものだろうか？ メイジー？ おれにはわからないだろう。邪魔になるものは何もない。垂れ下がりも突起も何もない。滑らかで湿って。紙に指。あらゆる目的のためのティッシュペーパー。口紅ときゅうり。目。いいや、おれはおまえの方に行かない。決してない、というのがもっとも適切な言葉だ。それが汗まみれで好きなやつも何人かはいる。動物的労働。墮落した仕組み。ピチャピチャとコンドームをつけないで。神のイメージで。ただで。十分よくない。卓越した手際の良さに相入れない自墮落。汗と唾以外に見せるものなし。慈悲の行為。五分五分の賭。金か命か。無で有。押し並べて均一化。そうではない。そうではない。

船がある。おれに一艘。それはいい船だ。多くの船。こびとたち。あの太陽を一目見よ。血に飢えている。多くの帆。こびとたち。くだらないおしゃべりをするこびとたち。太陽も鋼鉄。鋼鉄も同然。もしおれがハガネなら。すべての問題は解決。行動する準備。眠り。

ピートは事務所の中に歩いて入って行き、後ろでドアを閉めた。

ああ、と机にいた女性が言った、リンドさんがあなたに会いたいそうです、コックスさん。

私に？

他に誰が？

のどをくっくと鳴らす金髪の頭が幾つか会釈した。

今か？

女性は頷き頭を傾げた。ピートは遠くのドアまで進んでいって、ノックをした。

どうぞ中へ。

ピートは入った。

ああ。

あなたが私に会いたいと聞いたんですが、リンドさん。

ああ、そうだ。会いたかったんだ、とリンド氏は言った、タバコ入れのふたを手のひらでなでながら。入ってくれるかね？ ドアを閉めて。それで結構。さて。そう。

座りたまえ、コックスくん。

有り難うございます。

ピートは座った。

さて、コックスくん。

リンド氏は机の上を軽くとんとんと打った。

吸うかね？ 彼は勧めた、手は机の周りでさまよって。

いいえ、結構です、リンドさん。

それじゃ、さて、コックスくん、とリンド氏は言った、近頃はどうかね？

ああ、とピートは言った、そんなに悪くないですね、ご存じの通り、リンドさん。

両手の指を握り、遠慮深く鼻をすすって、リンド氏は口を閉じて微笑んだ。

結構だ、彼はにっこりした。で仕事の調子はいかがかね？

ええっと、とピートは言った。それにお答えすることができないと思います、リンドさん。お返事は、こう言ったらいいでしょうか、あなたがそれを満足すべきと見られるかどうかにかかっています。

椅子の上で急に向きを変えて、リンド氏は暗いガラスの飾り棚に写った自分の影をじっと見た。

全く私の言わんとすることとちがうんだが、と彼は言った。しかし、コックスくん、きみの仕事ぶりは、そう、全く満足すべきものと言えるよ。

ああ、ピートは言った、有り難うございます。

私は、むしろ、とリンド氏は後ろに向きを変えずポンを引き上げて言った、私はそれよりむしろ、きみ自身それについてどう感じているのかと言おうとしたんだが。

私自身それをどう感じているかですって？

全くはっきり言って、コックスくん、とリンド氏は腹のところでこぶしをぐっと握って言った、同僚の何人かは私自身と異なるんだが。

異なる？

スタッフのことだが、従業員に対する私たちの見方において、という意味なんだ。自分としては、私は彼らの、あー、心の健康を、そう言っていいならだが、会社全体の能率に影響を与えらるものとして見なしているんだ。

全くその通りですね、とピートは言った。

私は、もちろん、きみがあの、もちろん無知でないと理解しているがゆえに、きみにこのことを言うんだが、コックスくん。

ピートは鼻を掻きそして呟いた。

しかし私が言わんとしたことは、コックスくん、とリンド氏は胴体を前に倒し額をへこませて続けた、私が、うーん、きみは、どのように言おうか、なりがちな傾向にあるという印象を一、二度もったということなんだ。

彼は机の右手におかれた黒の革製手帳を開いた、そしてしっかりとそれを閉じた。散漫だね。

ほう、とピートは言った、左の脚の上で右脚を交差させながら。

そう、とリンド氏は言った、肘を支え指を曲げながら、きみは熱中していない、と言おうか私の印象だが、仕事に。

仕事に熱中する？

ああそうだ、と元気よく頷いてリンド氏は言った、いわば。

どういう意味だ、いわばとは？ おれをいらいらさせるなよ。

しかし保証しますがリンドさん、とピートは言った、私には仕事が非常に面白いですよ。集中すると多くの誤解を与える側面もでてしまうと言うべきでしょうか。自分自身を試してみろ。

なんだって？ リンド氏は言った、目が平らになって。

いや、私が言おうとしているのは、、、

リンド氏は手のひらを突き上げて、あからさまににやっと笑った。

私は全く、、、ではなかったんだが。

いえーとピートは始めた、わたしはー

彼の足は机をどんと打った。

いえ、彼は微笑みながら言った、わたしは気にしていませんよ、リンドさん、もしそれがあなたの言おうとされることなら。多分、当時は進行中の仕事についてちょっと考えことをしていたんです。

リンド氏の額が言葉をさえぎった。

ああ、と彼は言った、そう聞いて嬉しいな、コックスくん。私は、ねえ、きみには非常に多くの将来性があると信じているんだ。

彼は強く鼻をすすった、そして懐中時計を手探りした。

誰がおまえにそれを言ったんだ？ おまえの乳母か？ 人が言う言葉を信じたくないんだな、おい。さあさあ解雇しろよ。もうたくさんだ。おれたちは小娘たちのチーズとクリームのような。認めろ。おれは理解しがたい人物なんだ。

リンド氏はかちっと懐中時計を閉めた。

言ってくれたまえ、コックスくん。

はい？

正確に言って、何なんだ、もし、いわば、私の問いが迷惑でないなら、彼は笑った、

きみの抱負は？

ピートは、リンド氏が葉巻タバコの箱を開けそれを閉め、そして悪びれることなく顔を上げるのを見た。

残念ながら、と彼はあごをなでながら答えた、私は今までそのことを考えたことはありません、リンドさん。

本当に？ それは驚かされるね。

リンド氏は目をぱちくりさせ、首をゆるめるため、背筋を伸ばして顎を突いた。

私は信じているからなんだが、と彼は喉をごくりとさせて言った、そしてこれについては私だけではないんだが、この会社が関心のあるところではきみはある程度の可能性を持っているんだがね、全く率直に言って。

彼がカレンダーを机の端に押そうと体を伸ばしたとき、太陽が彼の腕にあたった。彼はその落下を防ぎ、立とうと跨ぎ、そして背筋を伸ばして椅子で揺れ動いた。

いいだろう。しかしきみは、思うに、他に関心があるのかな？

ああ、そうです、とピートは言った、わたしはかなりたくさん他のことに興味があります。ほとんどは家庭的なことですが。

へっ？ きみが結婚しているとは信じられないが？

リンド氏の目が輝いた。その含み笑いが一つになった。

いえ、していません、リンドさん。

そうか。ええっと、多分少々詮索が過ぎたね。

全然。

リンド氏はジャケットの袖口を上げて調べて、小指でシャツの袖口をピシッと打った。

それでは、と彼は終えた、私と話したいときはいつでも、どうか遠慮しないでそうしたまえ。

それは非常にご親切なことで、リンドさん。

結構、とリンド氏は椅子にすわったまま言った。

ピートは立ち上がった。太陽が文鎮を裂いた。

有り難うございました、彼は言った。

いや、いや。

子羊よ、誰がおまえを作った？

ドアは、カーペットにあて木をさされていて彼の後ろで閉まった。

太陽が町では低くなった午後遅く、ピートは石階段の下で壁に寄りかかって、タバコを吸い、窓越しに赤いバスが川のそばの木の下を動いていくのを見つめた。

川には何ら警報はない。川には全く汗もない。鋼鉄のみ。鋼鉄の臭い。潮にのった鋼鉄のきらめき。金属の水面へ光の大群。様々な声。

彼の頭上でざわめく声。それらは軽く、とらえどころなく下降する 高く旋回し低くなり、笑いへと消えていき、縮まって石のささやきになる。靴は、頭上でこすれ、そして

ささやきながら立ち止まった。彼は、階段のスロープの下に閉じ込められ、しかめっ面をして呟く。やつら、女たちは、階段の先で穏やかに話し続け、笑い、ささやく。カチツと言う靴が、角を立て先が金属で飾られ、石の上で響く、見られず、下り坂の石でカチツと音を立て、そして回転し、立ち止まる。声と声の間でため息、低く、次々と放たれるぺちゃくちゃのおしゃべり。背中を壁の表にもたせかけ、ピートは素早く争う囁き、石で取り巻かれた擦れ合うつぶやきを聞いた。一つの声が、今判読されないで滑り落ち、裂けた耳に滑り込み、ぶつぶつの糸状の壁を踏み、響きの中小さく分割していく—それ自身の音。頭上で、一つの声が傾き、靴が石を打ってきしんで歩く中、しゃがれ声でよどみなく、聞こえたり、聞こえなかったり。一人が終わって他に話させ、聞く。ピートはぶつぶつという壁にもたれ、顔を明かりの方に向け、聞きふけた。人々の歩みが石の上を前に滑って行き、笑いが大声で、開けっぴろげに響く、言葉無く。ドアがぱたんと閉まった。

行ってしまった。甘美さ。明かり。腐った物。粗野な物。王国。
彼は階段を上って、事務所に入った。

ああコックスさん。あなたに誰か電話ですよ。

えっ、今？

ええ、丁度鳴ったばかり。

全てが聞き耳。目。

もしもし？

コックスさん？

はい。どなたですか？

電話をしたのは、わたしのお客さんがあなたの天井の仕事に満足していないということなんです。

何ですって？

お客さんに保証を与えていたことを忘れないでください。彼は捨てられた物に対し六十パーセントを受け取るのはかまわないのですが、雨漏りには我慢できないのです。あなたがあなたの義務を果たせば、そうすれば彼は彼の義務で同じことをするでしょう。私のお客さんは喜んであなたに与えるでしょう

レンさん、今はだめです、忙しいんです。いつお会いできますか？

あなたはこの状況の重大さを理解していないように見えますよ、ポックスさん、コックスさんのことだが。水道管設備が故障していて、メーターの動きが悪いんですよ。グランドピアノは恐らく修理不可能。もしあなたが取引をするのなら、それを守るのがあなたの義務ですよ。私のお客さんは承知ですよ、それなら。もしあなたがこの近くにおいでなら、仕事後に会って下さい。

これは前代未聞ですよ。

じゃあまた。

塩漬け発酵キャベツを持ってくるのを忘れないで下さいよ。

10

来たよ、とレンは言って玄関マットで足を拭いた。雨ふってないよ。

彼は壁から玄関の鏡を取り外して、階段の下へ持ってきた。

戻しとけよ、とマークは言った、そして彼について部屋に入っていった。

これはきみが家で持っている一番いい家具だね。知っていた？ スペイン製だよ。ポルトガル製じゃないよ。きみはポルトガル系だったね？

戻しとけよ。

レンは鼻を捻ってじっと見つめた。

ぼくにはきみがわからない、と彼は言った。

戻しとけよ。

鏡を覗いてよ。きみの顔をこの鏡で見てごらん。そら！ 滑稽だよ。きみの肝臓は腎臓で包まれている。きみの目鼻立ちはどこだい？ 何の容貌もないね。ここに鼻があり、そこに耳がある。今まできみは自身を騙し続けて来ているよ。これは何だと思われている、顔？ プロードムアへ行く用意ができているように見えるよ。ぼくはなぜきみと付き合うのかわからないが。

その鏡を元のところへ持って行けよ、レン。

ぼくは今日ピートと会ったよ。仕事の後会った。そのことを知らなかったろう。この鏡？ その鏡に何がいやなんだよ？ それがどうかしたのか？ 思うに男の看護師を呼ばなければいけないようだね。

彼は階段を歩いて昇っていき、壁に鏡の裏を引っかけた。マークは肘掛け椅子に腰を下ろして、彼が戻り、戸口でちょっと止まるのを見た。

ぼくはきみのことをあやしんでる。しばしばあやしんでる、とレンは呟いた。しかしぼくはペダルをこぎ続けなければならないんだ。ぼくはしなれば、タイム・リミットがあるんだ。

あるのか？

そうさ。

彼は微笑みそして部屋を見渡した。

きみはここに誰かを隠しているね？ 何なんだ？ ここで一人ではないね。

全くそのとおりだよ。

ふむ。エスペラントはどうなった、きみの？ 忘れないでね、何でも二オンスを超えたら一ペニー上がるよ。

助言には感謝するぜ、マークは言った。

うん、しかし、ぼくには何の助言をくれるんだい？ 何もなし。ぼくは行くよ。へとへとだよ。どうしようもない。どうしてくれる？ きみはわからない。しかしいい。ぼくがどこに行っていたかわかるか？

いいや。

コンウエイ・ホールに行っていたんだ。「大フーガ」を丁度聞いてきたんだよ。あのようなのは聞いたことがなかった。あれは音楽的でない。肉体的だよ。身体。音楽でない。棺の中で誰かが骨をのこぎりで切っている。

ほう、そうか？

今日ピートに会ったよ。

聞いたぜ。

仕事の後会った。二人でエンバンクメントを歩いたよ。一ポンド貸すよう頼まれた。

それで？

断った。

えっ？

きみにはわからない。ぼくは彼に言ったんだ、もし一ポンド貸せば、それは事件になるだろうって。そしてぼくは事件と関係したくない。

マークは片目を閉じ、そしてタバコに火を付けながら横目で見た。

やつはそれに対し何て言った？と彼は尋ねた。

何を言ったかって？彼は言った。彼は話した。彼には言い分があった。ねえいいかい？彼と別れてから以前には考えたことがないことを考えていたんだ。前には思ったことがない考えを考えていた。

彼は腕を振って、そして下ろした。

ほらちょっと、とマークは言った。

何？

何故おまえはピートを一人にしておかないんだ？

一人にしておく？

少しやめてみたらどうだ。やつはおまえに役に立たないぜ。

何て言った？

やつとうまくいくことができるのはおれだけだよ、とマークは言った。

きみが？

そのとおり。やつとうまくいくには、おまえはある種の「何か」を持たなければいけない。いずれにせよおれはそれを持っていて、そしておまえは今のところ持っていない。おまえにどんないいことをやつはする？おまえはひとまず引いておくべきだ。

きみは彼とうまくいっているの？レンは言った。

やつはおれに勝手なことをしない。おまえにはするぜ。

どうしてぼくに勝手なことをすると思うんだい？

おまえは絶対に好きなことをしろ。

きみの味方につけと言うんだね。

どういう意味だ？マークは言った。

レンは壁から柄の長いトースト用フォーク取り外して、じっと見た。

これは、天才的なしろものだね。

何が言いたい？

トーストを作ることはあるの？

レンがフォークを明かりに向けたとき、それは彼の手から滑って、カーペットに落ちた。マークは前に屈んだ。

それに触らないで！ レンはしっと制止した、手で空を切って。だめだ！ それに触ったなら何が起こるかきみは知らない。触ったらイエス・キリストがやってくるんだ。それを知らないね？ キリストが怖いだろ？ きみを怯えさせるよ。

お願いだが？

だめだよ、しかしきみを震え上がらせているね？

レンは素早く屈み、床からフォークを持ち上げた。

さあそれ。ぼくが触っても何も起こらないだろ。誰もわざわざ触らなくていい。ぼくはかび臭い古い衣服の押し入れにいる。ぼくは古い服の臭いを放つ。ぼくはボイラー室だけに向いている。タール、汗、エンジン。それがすべて。どのようにきみはぼくを見ているかきみはわかっている？ もしぼくが笑ったら御免。明日笑うよ。ぼくが人間であるかのようにきみはぼくを見ているね。きみはこのゲームでは熟達者だよ、しかし、そのようにぼくを見たって無駄だよ。きみはぼくの目を真っ直ぐに見ようとしているね、そしてぼくはきみの中心点を見ているよ。あるいはきみはぼくの喉を見下ろしているのか？ もしきみがそうなら、きみはずっと先を見ることがきっとできると思うよ。いずれにせよ、ぼくは中心点を義眼でじっと見る方が好きだ。できる時に。きみはぼくに他の何をしてもらいたいの？ ぼくは決して薬の処方を書く人間ではなかったよ。きみはどうなの？ きみの処方は場所をすみずみまで、くそっ、きっと大いにきれいにするだろうな。そのようにピートのもするだろうね。しかしそれらはぼくの処方ではない。ぼくは薬の処方を書かないよ。

彼は肘掛け椅子に倒れ込み、トースト用フォークをぐっとつかんで、そして目を覆って、ゆっくりとそれを彼のわきへ滑らせた。

ねえーぼくは割れたガラスが見えないよ。ぼくは透かしてみなければならぬ鏡を見ることができない。裏の方は見える。反対側は。しかし鏡の方は見えない。

彼の頭はだらりと垂れて、彼は泣き叫んだ。

ぼくはそれを、そのすべてを割ってしまいたい。しかしどうやって割ることができる？ それを見ることができない時どうすれば割れるだろうか？

彼は歯の間からしゅーしゅーと音を出し、激しく頭を振った。

きみは石だよ。ぼくはきみの中で死んでいるのか？ ぼくは最善を尽くしたんだ。

もしこの椅子からぼくが動けるなら、ぼくは行くよ。

ピートとバージニアは今すぐにもやってくるぜ、とマークが言った。

それはかまわないよ。それは、ほんとに、結構だ。ぼくをそっとしておいてほしい。

きみは何が欲しい？ ああ、この部屋の臭いをかいでみて。かいでよ。この部屋はぼくが来て以来変わったんだ。ぼくがここに染み込んでいる。今や全くつんとする臭いだよ。

おまえは間違っている。部屋は同じだぜ。

いや、そんなこと信じるものか。きみは知らないのだ。この部屋にどんな詐欺師がいるのかきみはわかっていない。

いいや、わかっている。

いや。きみはぼくについて何か知っていると思っているが、きみは知らない。ぼくが何なのかきみは知っているか？ ぼくは宮殿で嘔吐する浮浪児だよ。ぼくには道徳的腐敗がある。あらゆるところで腐る。建物を食い倒す虫についてはどうだ？ それに似ているものだ。ぼくはずーっとこの肘掛け椅子にすることができる。あるいはベッドに。そうだ。きみは知っているか、ぼくが足を踏み出せないのを？ ぼくはベッドから踏み出せない。床に足をつけることができない。ぼくはそこにいつまでも留まることができるんだよ。人々に来させ、ぼくに食べ物を与える。十分簡単にそうすることができるよ。そうだ、きみは知らないんだ。この部屋に何がいるかきみは知らない。古い骨の袋。しかしきみはわからないかい？ ぼくは自殺をすることさえできないんだよ。それは決心でなければならない。それは行動さ。ぼくは行動できないのだよ。ぼくは自殺をすることで正当化されない。それは価値がないし、意味がない。自殺は無意味ではない。それは行動だ。それがその本質だよ。

11

こびとたちは通りの角への旅で何をしているんだ？ やつらは溝でつまづき、懐中時計を取り出す。チョーク顔をした一人が昼の残飯をゴミ入れに投げ入れ、ふたの上に腰を下ろす。彼は食べはしないが嘔み始めている。今やつらは裏口の上がり段に集まる。一人は低い流しで彼の血管をごしごしこすり、今は残飯で腹一杯詰め込んでいる。ごちそうに間に合って、こざれいにし身仕舞いをする。時間はきっかりと守られている。

ピートは小屋にいる。彼は中庭からの骨のおしゃべり、剛毛のある皮膚の掛け合い問答を聞くことができない。彼は自分自身の声を聞いている。今度はマークだ、彼は鏡で髪をくしで整えている。彼は関連した角度で六つの小型鏡を置いている。彼は上向きにした鏡に向かってマルコの歌を歌う。彼は窓の外のマーケットを見ない。彼は自身を見て微笑む。床は木目までごしごし洗われる、ぼく自身の仕事。ぼくが寄付し、家屋敷を又貸しするのはこの基金の管理組織に対してだ。ぼくは抜け目のない売買契約をする。ぼくが発起人だ、もっともピートもマークもその契約や契約者に気づいていないが。彼らはまだそこにいる、彼らのうち二人は。あるいは多分、彼らはいなくなってしまった。ぼくたちは待たなければいけない。ぼくは待つ覚悟をしている。ぼくは待つのを止めた

くないのだ。この不寝番の終わりは無の始まりだ。

12

来たれ、来たれ、死よ、そして悲しみの糸杉に我を横たえよ、とピートは歌った。

太陽が沈んでいった。ライラックが弓のように曲がった木に重く垂れ下がった。庭は揺らめいた。低い布張りの折りたたみ椅子にレンとマークは横になっていた。ピートは荘重に葬送歌を終え、庭のドアのところに佇んだ。

おれはこの庭が好きだな。静かなので。

庭の下の方ではかがり火が、燃えて、割れ目で崩れ、裂けた。煙がフェンスを越えてかすかにしみた。

おれの心は空白だ、とマークは言った。

最初にそこに入ってくることを言ってよ、とレンは言った、

水曜日の精神病院でひげを剃っていた時、おれは毒キノコがぼかんとした臆病者の上に座しているのを見たんだ、とマークは言った。

おやおや。

ほらごらん。

おいちょっと、とピートは言った、考えることによっておれはこういう状態に陥り、考えることでおれはここから出るようにならなければならない。おれが何を望んでいるかわかるか？ 効率のいい観念なんだ。おれの言う意味が何かわかるか？ 効率のいい観念だ。作用のある観念。おれが金をかけることができる何かだ。五分五分の賭け。何も保証はない、あたりまえだが。しかしおれは進んで賭けるだろう。決して賭を止めたことがないが、近頃は少し挫折をしている。それがおれが必要とするものなんだ。言おうとする意味がわかるか？ もちろん、人々の何人かは彼ら自体が効率のいい観念だ。おまえ自身が効率のいい観念かもしれないぜ、マーク。おまえは決してそう言えないだろう。おれは判断を下したくないが。しかしおれはそうではない。おれはそれでひどく苦しまなければならなかったぜ。そしてもしおれがそれを把握できたなら、おれはそれをもうかる商売にしなければいけない。不正利益をはかることも、ごまかすこともできない。人々の中には一週間で三、四日休む余裕のあるやつも何人かしよう。おれは時間の余裕がない。おれが何を言おうとしているかわかるか？

彼らのごくまれで効率のいい観念のようだが、とマークは言った。

そうかもしれないな。しかしおまえに言ったぜ、考えることでおれはここに入り、そして考えることによりここから出なければならなかったと。

おれは考えることをしないやつをかつて知っていた、とマークは言った。やつは夕方いつでもできる限り早く家に急行し、肘掛け椅子の向きを変え、それに座り、そして窓の外を見ていた。約二時間後暗くなった時に、起き上がりそして明かりをつけたのさ。

そうだ、とレンは言った、しかし効率のいい観念についてきみが言おうとすることをぼくはわかるよ。くるみ割り器のようだ。きみはくるみ割り器を圧縮する、するとそれはクルミをぼんと割る。エネルギーのむだがない。それは正確な過程で効率のいいそれだよ。その考えは有効だよ。

いや、とピートは言った、おまえは間違っている。むだがある。おまえが固有のてこ作用でクルミ割り器を圧縮する時、クルミは割れる、しかし、同時に割り器のちようつがいは摩擦を生み、付随して起こる熱を発散する。それはその特定の観念には不必要だ。それはほとんど効率がいいが、全くそうというわけではない。なぜならエネルギーの漏れと浪費が全く無駄にあるからだ。それは経済的ではない。それは、結局、芸術作品に関して全く同じなんだ。芸術作品のあらゆる部分はクルミを割る、あるいは最後のクルミを割る圧力を作り出すのを促進するはずだ。おれが何を言わんとするかおまえにはわかるか？ 各観念は迫力と節約を持たなければいけない。そしてそれを表現する、こう言ってよければ、イメージは、その観念に正確に対応し関連しなければいけない。その時だけ人は、言葉を発することについて、そしてその時だけ作品の達成について語るができるのだ。もしいくらかの過度な熱あるいは摩擦があれば、もしいくらかの浪費があれば、失敗した、そして再び最初から始めなければいけない。非常に単純なことさ。

しかし太陽と月についてはどうなの？とレンは言った。太陽と月については曖昧なものは何かないの？

さらにまた、とピートは続けた、自身の効率のいい観念を構築するやつに都合が悪いことは何もないが、先ず第一に、そいつは、効率のいいという言葉によって何を意味するのをはっきり確信していなければならないぜ。そしていったんそいつがそれを理解したならば、その観念は何と関連するかを、あるいはそれはいやしくも関連しているかどうかを決めなければならないぜ。過去において十分適切であった観念の中には、今ではエッジウエア・ロードの向こうまでも人を連れていけないものがいくつかあるだろうよ。日常の有効性と相対なそれ、かつては適切だったかもしれない、あるいは異なった環境では適切だったかもしれないが今はそうではないそれ、の間をおまえたちは区別できなければならなかった。それは、おまえたちがそれをどんな世界に関連させるかを考慮する問題なのだ。

でも、おれたちはそのことでどんな間違いもすることはできないんだぜ、とマークは言った。

おれにはわからない、とピートが言った。マーク、おれたちがその点で全く意見が一致するということがおれにはわからない。

おれたちは二つの異なったことについて話をしているかもしれないってことか？

そうだ、結局のところ、おまえたちはまさにどんな世界について語っているのか？ どんな世界？ おまえが嗅ぐことができるまでの全範囲だよ。前方も後方もそして中も外も。

そうだ、しかしおれは時々、おまえはすぐ鼻の下にある適切な事柄を嗅ぎつけ損ねていると思うぜ。おれの言う意味がわかるか？

おまえが間違いなく仄めかしていることをおれは嗅ぎつけていると思うがな。

だがごく率直に言うと、マーク、おれが示唆しているのは、おまえは身の周りで起こっていることに十分な注意を払っていないということなんだ。

重大ニュースのことを言っているんだな。

それ以上のことだ。おまえは周辺で起こっていることに左右されている、そして自分の幸福や生存に関してはそれに依存しているぞ。どのようにしたらおまえが巻き込まれないようにするかはおれにはわからない。これがおまえが住んでいる社会なんだ、そしておまえはその取引の自分の役割を果たしているとおれは言えない。

おまえはバスの切符世界のことを言っている。

結構だ。おまえがポケットに二ペンス持っていて、運賃を払うとする。しかしおれには、おまえはその二ペンスと、もっと適切に言うと、乗物そのものを当然の権利として見なしているように見えるんだ。おまえの二ペンスの払い方で、実際おまえは全然払っていないんだ。ただで乗っているんだぜ。おまえは、二ペンスは汗で、そして乗車も汗だということが十分よくわかっていない。

おれは世間の銀行預金残高では負債だよ。

おまえは負債どころではない、とピートは笑った、おまえとんでもない幻影だ。時々おれはおまえがいやしくも存在しているなんて信じられないぜ。

しかし、おれが存在しているとおまえが信じているところは、とマークは言った、寄生虫のようだ。

必ずしも完全にそうではない。

寄生虫、とマークは立ち上がりながら言った。しかしそれは不正確だ。おれは他人の稼ぎで生きてはいない。おれは現金箱から何も盗んでいない。現金箱に対しては軽蔑以外に何ももないぜ。おれはおまえが語っている基準には関心がない。おれは自分の渴望に従っている、それだけだ。それはおまえの好みに合っていないし、それは誰の好みにも合っていないかもしれない、それでどうだと言うんだ？ おれは大きな基準を切望していない。そういうのはおれには当てはまらない。おれはそれを受け入れて生きることはしないぜ。

それが重要だ、とピートが言った。おれがおまえを咎めているのは、人生に影響を与えていることだ、人生で活動しているのでなく。

もしおれがひもとするなら、とマークは言った、おれは自身のひもだ。他のだれのひもでもない。おれは自分自身の人生で生き、活動している。

おまえは試験管の中でへとへとになって安全に生きることができない。

間違ってるぞ。

おまえの危なっかしさは、マーク、突っ張る態度だけになるかもしれないということだ。

まだ玉を持っている間はそうならないぜ、おい。

人々はおまえを助けないだろう。やつらは立ち去るかもしれない。

やつらをぐでぐでんに酔わせるさ。

いいか、おれが気に入らないことは、おまえは時々少し休みを取りがちだということだ。

もしおれがそうするとして、有給ではないぜ。自分で払うんだ。いずれにしる休暇という言葉は適切ではない。休暇という語は、おまえのコースからおれがはみ出しているから使うんだ。おれは自分のコースからは外れていないぜ。

ああ、とピートは言った、それには何らかの真実があるかもしれないな。おまえに言ったが、おまえは有効な観念かもしれない。

彼はマークにタバコを回し、マッチをすった。

おまえがおれについて理解していないことは、とマークは言った、このことだ—おれには野心がないということ。

ピートは彼を見た。

ああ、と彼は言った、わかった。

いいか、マークはぴしゃりと言った。そろそろおまえたちに一つ他のことを おまえたちのために 言っておいてよい頃だ。

何だ？

おれが割礼をされて生まれたのを知っていたか？

何だって！

変なじじいが必要なことをするために切り盛り用大ナイフを持ってやって来て、そしてショックでほとんどぼったり倒れて死ぬところだったぜ。連中はただでやつにダブルのブランデーを与えなければいけなかった。やつはおれが救世主だと思いやがったんだ。

それじゃ、とレンは言った、すっかり白状しろよ。きみはそうなのかい？

少したって彼らは家を出て、池を過ぎてカフェ・スワンまで歩いて行き、バージニアに会った。彼女は既に来ていて、角に座っていた。

ええと、彼らがお茶を手にして座ったときピートは言った、マリーはどうしてる？ あの子はいたって元気よ、とバージニアは言った。

マリー・サクソンのことか？ マークが尋ねた。あいつは今何をしているんだ？

ほとんどの時間を、とピートは言った、ソーホーで過ごしているぜ。さまざまな連中ととびはねているんだ。

あいつはまだおれのことが好きかい？

あの子はそのことに触れてなかったわ、とバージニアが言った。

おれに夢中だったぜ、とマークが言った、昔な。

彼女は、とピートが尋ねた、おまえがいつか耳のあたりをバンとはたたいた女ではないのか？

いや、それはリタだよ。

ああそう。リタね。

それは何のこと？ レンが尋ねた。

彼女はこいつをだましていたんだ、ピートは笑った、それで、こいつは彼女の歯を打った。

必ずしもそうではないが、とマークは言った、あの女がそれを求めたんだ、いずれにせよ。それはあいつにとっては人生の最大の驚きだったろうぜ。おれは後悔していない。敬意というものを教えてやったんだ。たのむよレン。おれをそのように見ないでくれよ。おまえはその女を知らない。ほかに行動の余地がなかったんだ、確かに。それでマリーはもうおれを恋してない、そうだろう？

恋してる？ ピートが言った。あいつはホテルのベルボーイやひどい連中にその何とかを売りつけているぜ。

カフェの中にある部屋から、ギターの音が強く下手にかき鳴らされて聞こえてきた。

あなたたちはみんな何をしていたの？ バージニアが尋ねた。

お喋りだよ、ピートが言った。社交の夕べだ。

その通りさ、マークが言った。

おれはレンに説明しようとしていたんだ、とピートは言った、いかにやつがおれの医療計画のもとで恩恵を受けているかを。しかしやつは耳を貸そうとしないんだ。何の本、バージニア？ マークは尋ねた。

『ハムレット』よ

『ハムレット』？ ピートは言った。

どんな感じだ？

一風変わってる、とバージニアは言った、しかしわたしは突然彼に何の美点も見つけられなくなったわ。

本当に？ マークは言った。

ええ。

なぜ？

全く、と彼女は言った、全然よ、わたしは—結局、彼は何？ 彼は何なの、邪悪で、涙もろくて、意地が悪くて、そして自分の頭痛だけに敏感である以外には。全く魅力のない人だと思うわ。

彼女は椅子に深く座って、テーブルでスプーンを叩いた。奥の部屋から張り上げた声が、ギターに合わせてイタリア語で歌い出した。

まあ、とマークは笑った、それは一つの見方だね。

きみは全く間違っている、ピートは言った、もちろんのこと。

わからないわ、とバージニアは呟いた。彼はしゃべってしゃべって、そして時々誰かにナイフを突き刺す、それ以外に何をしてるの。剣のことだけど。

これはかなり面白いと思う、とピートは言った。しかし今はそれに立ち入らずにお

こう。

ぼくはもう行かなければならない、レンは立ち上がって言った。

うん、とピートは言った、おれたちも席を移そう。

徹夜の勤務か？ ドアまで歩きながらマークは尋ねた。

そうだよ、とレンは言った。ぼくのバスが来たよ。

それじゃまたな、ピートは言った。

レンは走って道路を横切っていった。

ギニー、家まで一人で帰れるか？ ピートは言った。おれは真っ直ぐ家に帰るが。

もちろんよ。

おれが家まで送ろうか、とマークが言った。

いいわ、いいわ、全く大丈夫よ。

おれのバスだ、とピートは言った。それじゃ。またな、マーク。

彼は道路を渡って歩いて行った。

さあ、とバージニアが言った、もう帰った方がいいわ。

マークは彼女の唇が動くのをじっと見ていた。

おれは多分 できるよ。

いいえ、大丈夫よ、マーク。たった五分位だから。

調子はどう？と彼は尋ねた。

いいわよ。

わかった。

では、と彼女は言った、もう行った方がいいわね、さようなら。

うん。

じゃあまたね。

さようなら、マークが言った。

さようなら。

13

ピートは素早く事務所から出て、道路を横切って歩いて行った。彼は人がいない電話ボックスを見つけて中に入っていった。ベルが鳴っている間、彼は通りをのぞき込んだ。

ギニー？

ええ。

家にいる？

いる？ もちろんよ。

わかった、これから行くよ。

なぜそんなに急ぐの？

三十分後にそちらに行くよ。

具合が悪いことでもあるの？

どこにも行かないで。

彼はダルストーン行きのバスに乗った。信号で彼は飛び降りて、駅の裏側の近道を通った。バージニアはバスロープのままフラットのドアを開けた。

非常に速かったわね。丁度バスに入っていたところなの。

何のため？ ピートは尋ねた。

ええ？

彼は台所に入っていき、ジャケットとネクタイをとって流しで顔を洗った。

悪い一日だったの？

タオルをつかんで、彼は振り返った。

どういう意味だ、悪い日とは？

悪い日は、悪い日よ。

何故きみはバスに入っていたんだ？

暑かったからよ。

彼はタオルを脇に投げて、居間に戻り、肘掛け椅子に腰をおろしてタバコに火を付け、マッチを消した、そし見上げて、バスロープをはだけたままのバージニアを見、彼女の体を見つめた。

乳首がなんてピンク色なのかみて。処女のように、と彼女は言った。

それにボタンをかけてくれる？

なぜ？

それにボタンをかけてくれないか？

彼女は紐を縛って、テーブルに座った。ハンドバックから彼女はタバコを取り出して火を付けた。

午後に誰がここへやって来たのだ？

ここに誰かいたのがどうしてわかるの？

カップ、カップ。誰だったの？

友達のマリー・サクソンよ。

何の用だった？

一杯のお茶よ。

あいつは何を求めたのだ？

とんでもない、何も望まなかったわ。

あいつは娼婦だぜ。

いいえ、そうでないわ。

ふしだらな女だ。

そよ風がカーテンを揺らした。バージニアは髪の毛をなでつけていた。

あいつがここにいる間にバスに入ったのか？

なぜ？

あの女がきみの脇の下を石鹸でこすったのか？

ピートは部屋を見回した。

おれがここに置いていった画鋏と画板はどこにある？

ここ。どこかに。

どこ？

全然なくなっていないわ。

もしきみがマリー・サクソンと親密な関係になるなら、バージニア、それはきみの終わりだぜ。

とんでもない。

そういう言い方を止めてくれないか？

いいえ、何て言ったらいいのかわからないわ。

なぜ何か言うんだ？

ああ。

そして頼むから、と彼は叫んだ、そのバスローブに紐をかけるよ！おれはおまえの股の毛を見たくないぜ。おれを何だと思っているんだ？

彼女は立ち上がって、バスローブを閉じ、そして再び座った。

あなたを何だと思っていいのかわからないわ。

わからないのはわかっているよ。くそわからないはずさ。もう絶えず尻におしろいをはたくのを止めて、自分の目を開ける時だぜ、おい。例えば、なぜ向こうへ行っ
て、今何か服を着ないんだ？自分のやりたいように貫いてきたな。この自慰的盛
りを抜け出するにはただちょっと努力がいるだけだ。

あなたは何について話しているの？

わからないのか、と彼は言った、誰かがそのドアをノックするかもしれないとい
うこと、そしてきみにはそのように開ける権利がないということが？

あなたは開けることができたわ。

きみには非常にがっかりするようになってきているぜ、バージニア。自分で何を
しているかわかっているか？これ見よがしに見せびらかせるのか、消えていくに違
いない他のふしだらな女のように振る舞っているんだぜ。

わたしはただバスに入っただけよ。

バスの後では服を着るのがふつうだろう。

ああ、お願いだから！

ピートはタバコを火格子の中に投げた。

それなら、と彼は言った、もしドアにノックがあったなら、きみはそのような格好
で出ていくのか？

だれか来ると考えないわ。

馬鹿なことを言うな。だれだって現れる可能性はある。だれかがメーターを調べに
来るかもしれないし。

その人は朝しか来ないわよ。

どうして確信できる？

その人は家にいるのよ、とバージニアは言った、庭を刈っていて。

彼女はパンを噛み始めた、そしてそれから立ち上がり、食器棚へ行き、そこでピクチャー・ポスト紙を取り上げ、ページを指でさっとめくった。

もしきみが考えることを始めてくれるなら、バージニア、きみはおれにもう少し役に立ってくれるかもしれない。現状では、全く正直に言うと、きみは重荷以外の何でもない。きみを今のまま受け入れるのを喜ぶ男たちがいるのはわかる、しかし、おれはやつらのことを詳しく述べる必要はない。やつらの必需品ならおれたちは知っている。もちろん、やつらの必需品がきみと同じものでもあるかもしれない。全くあり得ることだぜ、おれがきみについての思い違いで苦しんでいたということが。もしそれが実情なら、なぜきみはマリー・サクソンに自分をオートバイ乗りかフリースタイルのレスラーに紹介してもらわないんだ？

ええ、それについて考えるわ。

他には何について考える？

他には何も。

マリー・サクソンとは何を話し合っていたのだろうかとおれは思うぜ、とピートは言った。

たった一つのことだけ。局所サポーター。

そうだもちろん、ほとんどの女達は黴びた食料貯蔵庫のような心を持っている。ほとんどそれ以外にはあり得ない、と思うぜ。おれはマリー・サクソンに会った最後を覚えている。彼女は水着姿だった。やつらの胸は、物干し網の洗濯物のようにぱたぱた動いていた。あの女はそうした枠組の中で、もちろん、粗末なものだが、存在している。あいつの生は当然ながら果てしないひとしきりの自慰的刺激へと変わる。それが、あの女が生によって理解することだ。しかしもしきみがその過ちに落ちたならおれは失望するぜ、全く率直に言って。おれは以前きみにきみの美しさはどこにあるか言っただろう。もし

ピート！ あなたは何の用があるの？ 何が欲しいの？ 何が望みななの？

彼女は走って部屋を横切り、膝から崩れた。

わたしに何をして欲しいの？ わたしが何をしたと言うの？ お願い！ わたしが何をしたの？ 教えて、言って。

彼は彼女を見下ろした。

なぜきみは昨夜『ハムレット』についてあんなことを言ったんだ？

どんなこと？

『ハムレット』について。何故そう言ったのか？ 何故あのようなことを言うんだ？ それらはとても馬鹿げているのがわかる？ そのためにおれは非常に愚かに見えたぜ。きみにはそれがわかったか？ きみは『ハムレット』については何もわかって

いない、ギニー。そのことを理解していないのか？にもかかわらずきみは腕の下にその本をかかえてやって来る。何故そんなことをしたのだ、先ず第一に？印象付けたいためののか？正気か？マークが心を動かされると思ったのか？もしそうなら何になんだ？マークはおもしろがっていた。しかしおれはそうではなかった。それは完全にきみ次第なんだ 事実としてそれは別個の選択の問題だ きみがしなくてはならない選択 しかし大事な点は、ギニー、おれたちが一緒にいる間は、何も知っていない何かについて、あのようなとんでもないことをおれはきみに話させることができないということだ。全く分別をわきまえていない。きみのおかげでおれは、実際とんでもない馬鹿に見えたんだ。おれはきみにしばらくシェイクスピアを離れるように言ったと思ったんだが？それはきみ自身のためだったと思わないかい？彼の深い意味を理解し始めることができるにはきみはまだほど遠い、とおれは言ったことがあるだろ、そしておれが言うことを無視するだけでなく、きみはくだらぬ試験前の五年生のように出し抜けにその本を持ち出し、そしてこのようなばかげた考えをひけらかす。それは全くばかげているが、ばかばかしい以上だぜ。それは哀れだ。そしてそれは哀れを誘うだけでなく、ひどくいらいらの種となっている。きみには彼にかかわるなと言ったはずだ、彼についての意見をきみは発表できないと言ったことがある、それは非難ではない、なぜなら、百人いても二人もそうできないからだ、きみがしなければならぬ勉強についておれは言ったことがある、問題全体の複雑さについて暗示を確かに与えたことがある、おれはきみに、勉強を通しておれに教えることができるぐらいの状態に達するよう頼んだことすらある、そうすればおれはきみの才能に対していくらかの敬意を持ったに違いなかった、それなのにきみの行動の仕方がこれなんだ。あの言い方はできそこないだったと理解しているのか？どこでそれを読んだのだ？どこでそれを読んだにせよ、きみはその考えを消化さえていなかったんだ。きみはそのテキストを引用して、あの意見のことで議論したことがあるのか？もちろんないだろ。そのような明白な感情主義が批評的意見として通用すると思っているのか？他の思いやりがない連中の中でだったら玉をちょん切られていただろうよ。何も言われなくて実際非常に幸運だったよ。おれは、あの時言わないように決めてた。きみは、あのようにおれたち二人に恥ずかしい思いをさせたんだ。マークとレンは何と思っただろうか？おれはきみの文学的成長に何らかの関心を持っていると思われているんだ、そして突然、いわばおれの保護の下できみがそれをしゃべった。しかし、知りたいんだが、動機は何だったんだ？きみは何を証明したかったんだ？自分自身の意見が言えるということか？マークに自分は読むことができると証明することか？きみはもし腕の下に上級数学の本を持っていたなら、必ずレンに自分は二+二を計算できると納得させられると思うのか？最新の考えを開陳しているんだと真面目に想像していなかっただろ？きみは、その考えは、きみの安っぽいその表現ではないんだけど、最初から最後まで、しかもほとんど無能な人によって、とくと論議されてきて

そして吐き出されたということを理解していないね？ それ自体は役たたく表層的で、しかも洗練されてないということを知ってないね？ しかしそれは語るまでもない。おれがわからないのはきみの動機だよ。きみは故意におれを馬鹿に見せようとしたのか？ いや、おそらくたまたまだったんだ。いいか、よく聞けよ。きみは学校の談話室にいたんじゃないと言うことを忘れてるぜ、バージニア。おそらく神の言葉として通る所できみが言うことは誰も知らない。それは嘆かわしいことだ。さあいいか、きみはそれを言う前に言うことについて考えなければならぬ、そして、これが肝心の点だが、きっぱりときみは自分の限界を悟らざるを得ないぜ。きみは道義の点でそうせざるを得ない。それは許されない判断の過ち以外の何でもない、時、場所そして内容に関して。きみは適合性や文脈の観念がないように見える。そのためいくら善をなすどころか、積極的な害をなすはめになった。それは道徳的に弁護の余地がなく、倫理的にあるまじきことだ。それがどこから生じているか、故である。主張したい欲望。それは、ただのひどい大言荘言、皮相で、欠点があって、間抜けていて、途方もなく、そして恥ずかしく、更にもっと、完全に無分別。きみはおれたちが全て自分の祭壇に頭を垂れてくれると考えたのか？ きみは女だから許されるだろうと考えたのか？ それで、きみが何を考えようとも、バージニア、全く正直なところ、それはあまり納得させるものではないぜ。それは全て非常にうさんくさいと思う。おれはきみにはかなりの程度の信頼を置いているよ、実にはっきりとおれはきみを教育するのに最善を尽くしている、それなのにきみのやっていることは、おれたち二人を笑い者にすることだけなんだ。さあいいか、きみにわかって欲しいことはこれなんだ。他の社会ではきみは好きなことをする権利があるが、おれたちが一緒にいる間は、おれはこの種の振る舞いに我慢することを拒絶するよ。それはおれ自身と同様きみ自身のためでもある。そのような事柄でできることを全て喜んできみのため手伝うよ、しかしきみの方でのそのような行動は、ほとんど後ろからの闇討ちというに等しい。もしまだその意向を感じようとしているなら、きみはこの種のことを繰り返すことはないと言っても今やむだだ。きみがしなければいけないことは、均衡感、判断センスを伸ばすことだ。きみは才能をもっているがそれらを使うのを嫌がっているように見えるじゃないか。なぜ泣いているんだ？ いいか、きみは能力はある。ただそれらを明確にし、研ぎ澄ます問題だけなんだ。おれは常にきみの中のそれらを賞賛してきた。泣く必要は無いよ。おれを理解してくれたことはわかった。起こったことは、きみの芸術的感受性、均衡感が迷ったということだけだ。実際きみはそれをわかっているとおれは全く確信しているよ、ギニー。おれはきみの中にあるこうした才能に感心しているんだ、いつもそうしてた、ただ指摘しなければと感じただけなんだ。

ごめんなさい、と手の中に頭を入れてバージニアは言った、ごめんなさい。二度とそうしないわ。

いいんだ、ピートは立って椅子のひじかけに座り、そして彼女を胸に抱き寄せて言っ

た、いいんだよ、いいんだよ。
ごめんなさい、とバージニアは言った、ごめんなさい。
うん、ピートは言った、いいよ、わかったよ。わかったよ。

14

なぜおまえはそれをおおっぴらにしないんだ？ おまえの好奇心に今何が起きている？

ぼくに何を言って欲しいんだ？

口を割れよ、レン。頭の中のもやもやのためおまえが見えないんだ。

きみはぼくを容赦しなければいけないよ。ぼくは神のたたりによる不幸のまっ最中なんだから。

おまえはおれに死者を埋葬するため荷車を送って欲しいのか？

きみは非営利的事業か？

もちろん、そうではない、とマークが言った。誰がそうだ？ おまえはなにを言おうとしている？

時々きみはヘビだよ、ぼくには、レンがしゅーと声をだした。

さあおれを窮地に陥らすなよ、レン。

きみはぼくの家ではヘビだ。

ほう、そうか？

それは動機の問題だ。ぼくはきみの動機を信用しないよ、マーク。きみが来る人すべてから何らかの益を求めているのは理解できる。そうだ、誰だって求めるよ。しかしぼくは、きみがぼくの会社を買ったり売ったりしようとしているように見えるとき、ネズミのにおいに気づくよ。それはヘビの行動だ。きみはぼくを何だと思っている、腹話術師の人形か？ ぼくは、自分の口を開けそしてきみの中に入れた何かを言うのに異議を唱えるよ。ほのめかしによってだが。それは起こる。きみはどうかという座ってつま先を見ている。きみはぼくをはかりにかけている。きみはぼくを監視している。きみは始終換金している。どれぐらいきみはつくっているんだ？ きみはいいことに気づいていると思っている。ぼくはきみをぼく個人の歴史記録を作成したことで告発することさえできる、もっともぼくは何ら根拠のある証拠を持ってはいないが。全く正直に言って、ぼくはきみならやりかねないと思う。しかし、このぼくの売買、このぼくの全ての言葉、全ての行いにラベルを張るのには非常に強く反対するよ。きみは、ピートにはない科学的な頭を持っているよ。それは世間が理解しないものだ。ぼくはきみを不当に扱っているか？ わかったよ、それはどのように目論まれたんだい？ それはぼくには全く頻繁に、マーク、非常に計画的のように見えるよ。ぼくはその臭いが好きでない。ぼくはきみの目や誰かの目を見抜きたくない。ぼくは収支をそのまま合わせるのに大いに苦労してる。きみは何を求めているんだ？ ぼくの家でヘビを飼いたくないことは言うておくよ。

マークは立ち上がって、台所に歩いて行き、一杯コップに水を注いだ。彼はそれを飲みドアの入り口に立った。

ボールだよ、と彼は言った。

それはぼくにとっては何の意味もない。

おまえは何を待っているんだ、被告の抗弁か？

それはきみ次第だ。

ああ！マークは歯をきしらせた。

彼は椅子の端に腰を下ろし短く咳をし、そして炉床に唾を吐いた。

それでも、おまえがこのことをすべて言ってくれて嬉しいぜ、と彼は言った、げっぷをし口を拭いて。誰もわかりゃしないだろ？おまえが正しいかもしれない。おまえの結論だと、おれは詮索好きな男、ということだな。反論する必要もないな？おれに家を出て行って欲しいんだな？

好きなようにしろよ。

レンはこぶしを固く握り、椅子の肘掛けをゴツンと打った。

それできみは何も言うことは無いんだね？

ない。

きみはぼくが何について話していたかわかってるよね？

ああ。

そしてきみは同意しない？

マークは肩をすくめた。

きみは認めない？

マークはせき払いをし、たんを吐いた。彼は胸をたたきそして唾を吐いた。

何を

きみはぼくが間違っていると思っている？

マークは肩をすくめた。

しかし間違っているか？ぼくが考えていることときみが考えていることとは別にして、間違っているか？

おまえがか？

ぼくが？

マークは肩をすくめて、鼻をすすった。彼は鼻をかんだ。

今夜はきみはどうかしたのか？とレンが言った。きみはぶらぶらし、いたるところでげっぷをしている。

えー。

アーッ！レンがきしるような声で言った、そして震えながら、頭を素早く動かした。きみはぼくにラベルを貼るのか、貼らないのか？

おれの知る限りしない。

きみは本当のことを言っているのか？

マークは椅子の後ろにゆっくり動いて足を組んだ。

もちろん、とレンが言った、きみは自身真実を知らないかもしれない。

そう、そう、それは全くあり得ることだ。それは一つの可能性だ。ぼくはただこのつながりに結末をつけることができない。それにぼくは悩んでいる。

彼は髪の毛をなでた。

きみたちはぼくにはあまりにも傲慢だよ、と彼は呟いた。きみとピート、きみたちはあまりにも尊大すぎる。きみらのおかげでぼくは干からびてしまったよ。きみたちはぼくを家の外や中でいらいらさせている、きみらは全く知っていようがおかまいなしだ。ぼくは、時々ぼくはきみたちが遊んでいるボールだと感じるよ。

いったいなぜおまえがそんなこと？

時々ぼくは構わない。それからまた、部屋はよそよそしさで一杯になる。ぼくにはわからないんだ。ぼくにはピートが理解できない、ぼくは彼とは距離を感じている、時々だが。きみとぼくはめったに距離を感じない、そしてぼくはきみも理解できないところがある。きみは見かけほど単純ではない。しかしぼくは一つ知っているよ。最初にぼくが思った以上に深い穴をきみはぼくの方に作ったんだ。そうなんだ。世界を遠くに感じることに對して言うべきことは多くあると推測する。ぼくはそのことを知ったよ。しかしほとんど世界はぼくの頭上に座している。多分実際それはその時遠くにあるんだ。誰にもわかりゃしない。多分遠くにはそんなものはない。しかしあるのは知っている！

彼は自分の額をぴしゃりと打った。

ぼくは王国を失った。

マークはトースト用のフォークを取り上げて、耳の後ろで握った。

ぼくは、ねえ、とレンは言った、親密な人と細心な人にだけ応じるよ。ぼくはその方が好きなんだ。目を閉じて、生きていて感じて一人生きることができさえすればなあ。世界が大きな爆発音を立て始めたら、ぼくは不安を覚えずに生きられないよ。そして仕事で何一つしないよ。誰も蹴ることさえしない。しかしそれはそこでは非常に明白だ。列車が入ってくる、人々が降りる、誰もが何をすべきかわかっている。誰かがプラットフォームでばったり倒れる、そして誰もが何をすべきか知っている。それは容易だ。そしてそれは簡単なこと。ぼくは否定しないよ。それ以上に容易な何があるか？きみたちは物事を十分処理していると思うよ。きみとピートはミュージックホールのコンビだときみはわかっていたか？ぼくはピートについては何も知らない、彼の世界は毎日沈み、そして彼はやむなくそれを復活させなければいけないということ以外に。しかし彼らの二人。彼とギニー。何があったんだ？彼らだけの時、二人はジグを踊るに違いないと思うよ、他の誰もが理解できなかったんだが。しかしぼくはこれらのことについては何も知らない。それは閉じられた本で、しかもぼくにはあまりにも大きすぎる。しかしそれは大きいのか？ぼくは大きいものと小さいものを見分けることができなければいけないのだが。も

しできなければ、ぼくは死んだ方がいい。きみはうまく事を処理していると思うよ。ぼくに関しては、いい、ぼくは年をとらないんだ。ぼくは変化する。ぼくは死なない。ぼくは再び変化する。ぼくは幸せでない。ぼくは変化する。また不幸でもない。しかし大きな嵐が起こるとぼくは変化しない。ぼくは誰か他の人になるんだ、そのことは、ぼくが見るかげもないほど変わっていることを意味する。ぼくは、ぼくが受ける変化に遭遇する世界から変容されていて、変化を受ける立場から完全に退いていて、その時、鉄の仮面をつけ、以前よりももっとぼくが何も理解してない姿で、ぼくは嵐が通過するのを待つ。しかし同時に、認めるが、このような時にぼくは戻っていきたくもなく全くじっと座っていることは不可能なんだ。このような時に前進したいという望みを感じないことも、また不可能なんだ。ぼくは自制を学ばなければいけないよ。いずれにせよ、きみは事態を十分処理していると思う。ただきみは、ぼくの投入口にペニーを入れたために、ぼくが永遠に話し続けると思っているよ。しかしきみは間違っているんだ。ぼくのガソリン、燃料は切れようとしているのだ。しかしぼくは、長い旅の間の自分の食糧を確信するまでは出航はしないよ。あらかじめの考慮の欠如のために不足していることや、用意ができてないこと、無防備であるということはどのようなものであるかをぼくは知っている。ぼくは食糧を集めることに時間の全てを使い、決して岸から綱を解き放さないかもしれない。話すことに飽き飽きしているが、ぼくは常に話すだろう。多分それがぼくの仕事だ。全ての人には自分の仕事を持っている。しかし、ぼくは窓を半分開けることだけできるだけだ。窓が開くのを拒むのだよ。

彼はメガネを外して、そしてそれを膝の上に置いた。

しかしきみに一つだけ言うておこう。神秘は常に新たな神秘だ、ぼくはそう考えたんだ。それで、ねえ、ぼくは生きていて、死んだような忠告や生き方の法則の貯蔵庫ではない。そしてぼくはそうならない。しかしぼくは沈黙していなければならぬんだ、罪人のように。

彼は上を見上げて、メガネをかけた。

きみは知っていたか、疑い深い人間と死者は共通したことが一つあることを？ 彼らはものを言わない。勿論ぼくは今夜ぼくの疑念を討議にかけて、ぼくは沈黙しなかった。それできみはぼくが矛盾していると思うだろう、しかしもしきみがそう思うなら、ぼくは更に先に行く準備はある。実のところ、そしてきみはそれを受け入れるか拒むかどちらかにすることができるんだが、ぼくは疑いもせず死んでもいい。ぼくはそうでない。ヴァインシュタインはそうかもしれないが。困ったことは、真の問題は、もっとも、ぼくは精神的に死んでいないと確信できないということだ。全く率直に言うと、その証拠は抗しがたい、もしそんなふうには死ぬことが、ただ過去と通じ合うだけの能力、現在との交信の不可能性を意味するならばだが。ぼくは時々きみと、時折ピートと連絡を取り合うが。

ピート？ マークは言った。おまえにとってやつとの唯一の真のコミュニケーション

ンは降伏だろう。やつは食い尽くすぜ。あいつは、おい、家の外だろうが中だろうがおまえを食ってしまうやつだ。おれは言ったことがあるが、おまえは自分のために尽くす時だぜ。

きみは間違ってる、そして正しい。

マークはしかめっ面をした。彼は食器棚へ動き、リンゴをとりそしてかぶりついた。うん、とレンは言った、ぼくは時々連絡をとっているよ。しかし、ぼくがしているかないかどうかは重要ではない。ともかくそうしている。

それで？

それは隅だよ、いいかい、ぼくは片隅を占めている。ぼくは自分を寄せつけない複雑さがないところでは、ほとんどの時間誰とも話すことができないんだ。ぼくは、自身を人好きのしないやつと思わないでは自分を考えることができない。

おまえは行き詰まっているのか？

ぼくには可能性がないという意味かい？ いいや可能性はあるよ、確かに。それがどんなのか知っているか？ それは、役に立たない埋まったままのスペインのガリオン船のようなものだ。それは、絶対に表面には出てこない。ぼくの日々はすべて、マーク、ぼく自身の多量の埋まった宝物で過ごされてきたんだ。それは、ぼくの隅のどこかにある。すべてのものはぼくの隅にある。もっと早くにぼくがきみに言った全てのことはそこに含まれている。全てのものは隅の視点からだ。ぼくはむちを握らない。ぼくは労働に従事する方の人間だ。ぼくは隅の意思を遂行する。ぼくは身を粉にして働き、そしてそこから何も得ない。ぼくはある時、それから逃れたと思ったが、それは決して死なない、それは決して死んでいない。それでぼくは、物事があるがままに、あるいは実際あるかもしれないままに見ることを決して望めない。もちろん、ぼくの隅は全体でもあると理解できる。ぼくはそれを養う。それはたっぷり食っている。かつてはぼくには貴重に見えるものをそれに食べさせてやるより他に仕方ない、そして価値があったものが膿みに変わる。ぼくは何も隠せない。ぼくは何も捨てることができない。

彼は椅子の中で前に屈んだ。

いいかい、ぼくは埋葬された宝物には関心がない。ぼくのは今ここにある、即席で準備できて。きみは取ってみたらどうだ？ きみは手にできる。きみにそれをあげよう。取り給えよ。

いいや結構だ。おまえはそれを取っておけるぜ。

いいかい、とレンは言った。その隅は必要なものだと、生活の明らかな一片だと、もしよければ全体の中の全体だということをぼくは知っているよ、しかし、それを逃れるためには何らかでぼくは死ななければならぬと、ぼくはわかっていることを知っている。何が死ななければならぬ。ぼくは表に現れ出てきているのかもしれない。ぼくは何にしても、その中で死んではいけない。ぼくは連続して死んでそして生きると言えよう。入ったり、出たり、死んだり、生きたり。人々の中にはそ

れを面白い周期と呼ぶ人もいるだろう。

彼らは互いをじっと見た。マークは自分の頭をぴしゃりと打った。

おれはすぐにストップウォッチを使わなければいけない！

ぼくには何ができるとレンは尋ねた、椅子の中で体を二重に曲げ、馬鹿笑いをして。尋ねるんだが、ぼくに何が出来る？

マークは部屋を横切って歩いて行って、肋骨をばんばんと打った。

おまえは出ていくことができないという時、おまえは出ている。

外はどこだ？ レンが尋ねた、跳び上がって。

それは中でない、とマークは言った、隅に引っ込んでいます。

きみは中にいるなら外にいない、とレンは言った。きみは全く正しいね。

このように見てくれ。おまえは外にいるとき外にいる、そして中にいるときは中にいると。

ぼくはすぐにきみに処方箋を書こう！

マークはうめいた。彼はテーブルへ行き、ビールを二本開けた。

ちょっと、ねえ、とレンが言った。真実を知りたいなら、ぼくが本当にやっていることは、限界まで体重を下げようとしていることだよ。そうでなかったならぼくは賞金の金を失い、そしてきみはきみの取り分の十パーセントを得ないことになる。もしおれがおまえなら、おれはシャドーボクシングをするのをやめて、道路に出るぜ、とマークは言った。

ここに何をもってる？とレンは、食器棚を開けながら尋ねた。ガーキンはない？先日ぼくが何をしたか知っている？仕事してるやつに、オックスフォードの学生なんだが、きみの詩の一つを見せたよ。ぼくたちは丁度手動レバー式四輪車に出会って、二人とも五ペンスのチップを得たんだ。それでぼくはやつにきみの詩の一つを見せたんだ。

どのようにそいつはそれを見ていた？マークは尋ねた。

やつは時計に目をやった。ぼくたちは七番に行った方がいいと言ったよ。これらの連中の特徴は、やつらが詩を読むとき、決してドアを開けて中に入ろうとしないことだ。彼らはかがんでそして鍵穴を一瞥する。それがやつらがするすべてだよ。

知的な連中だ、とマークは言った。

そうだよ。ぼくはやつらの才能も見た。それは全く申し分なく明晰だ。それを否定することはできないよ。しかし人がその特質を感じる時そこには何も無いんだ。きみはそれを布きれのように拾い上げるとする、するときみはその実態をすっかり見抜くことができる。ぼくには彼らに話すことはできない。どうしてこの男にきみの詩の一節は英語でなくて中国語だと言えようか？それは中国語だ。そのフレーズは中国語だよ。どうしてぼくはそいつにそのことを言えようか？

どの一節だ？

そのことは重要ではない。覚えていないよ。

二人はビールを飲んだ。

問題は、とレンが言った、ぼくがそれらの言及の言葉を理解できないってことだよ。ぼくは門外漢だ。あのね、ぼくの詩に対する感じ方は、ギロチンが落ちるときタマネギを食べたり編み物をしている老婆のようなもんだ。それが真相だよ。きみは何を言おうとしている？ぼくはその言語スタイルが好きじゃないのさ。それが何を意味しているのかはわからない。ぼくにはその言語スタイルが嫌いなんだ。その言語機能が好きでないんだ。

こうした連中は、とマークが言った、あらゆるものがやつらのクロスワードパズルに嵌まって欲しいんだ。そしてやつらは一つでもはまらないと抗議する。あいつらなんかくそくらえだ。やつらは裏庭の便所のような心をしてるぜ、なあ、たとえやつらのくそが絹やサテンで包まれて出て来ようがだよ。

彼は灰皿から吸い殻を拾って、上に掲げた。

これがあんな類いのやつらに値するものだ。

ぼくはそれについては知らないよ。

軽蔑に慎重であって何の得があるんだ？とマークは言った。罵倒して侮蔑する覚悟をしるよ、レン。そうすりゃすべては終了だ。

そんなこと信じないよ。

ところで、詩の商売はどうだ？おまえのだが。

終わったよ。

破綻か？金庫には小銭も全然ないのか？

あるよ、しかし全く価値ない。ぼくはそいつにぼくの詩の一つも見せた。以来やつはぼくを見ない。やつはぼくが彼にそれを見せるということすらそれを個人的侮蔑として受け取ったよ。ぼくがどのように詩を書いているかきみは知っているか？ぼくは部屋に座り、そして角を見上げる。突然ぼくは立ち上がりレモンを絞る、果汁の一滴が出てくる、そしてそれが詩だ。これのいいことは何だろう？

厳しくて固いルールが全くないということさ。

そう？

マークはカーテンをさっと動かして、外の夜の暗闇を見た。

こうした連中は何をしているかきみは知っている？とレンは言った。彼らは飛び石のように言葉から言葉へと動いていくのさ。

彼は部屋中を歩き回って実演した。

飛び石のように。しかし教えてほしい。全く言葉が浮かばない一行に来たとき、彼らはどうする？答えられる？全く言葉が浮かばない一行に来たとき彼らはどうするのか？ぼくに言うことができるかい？

マークはビールを飲み干した。

きみに関しては、とレンは言った、きみが詩を書くとき何をしたらいいのか教えよう。きみはボタンBを押す、そしてきみの金を取り戻す。

注1 テキストは、Harold Pinter, *The Dwarfs: A Novel* (London: Faber and Faber, 1990) を使用した。